2015 India Study Tour

慶應義塾大学商学部新保一成研究会

2015年9月5日～17日

2015 India Study Tour

慶應義塾大学商学部新保研究室[*1] [*2] [*3]

2016 年 2 月 26 日

[*1] 研究室 Web サイト: http://www.fbc.keio.ac.jp/~shimpo/
[*2] Facebook ページ: http://www.facebook.com/shimpolab
[*3] 学生 Web サイト:http://shimpo-lab.sakura.ne.jp/student/

序

新保ゼミの India Study Tour は 2011 年 8 月に第 1 回目が実施されました。以来、今年で 5 回目を迎えたツアーを 2015 年 9 月 5 日から 17 日に実施し、16 名の学生が参加しました。

私は、福澤諭吉記念慶應義塾大学学事振興基金による国外留学の機会を頂戴して、2008 年 9 月から 2010 年 2 月までデリーに暮らし、TERI(The Energy and Resources Institute) で研究活動に従事しました。その時の経験をゼミや講義を通じて学生諸君に伝えて来たのはもちろんですが、将来の日本を先導する塾生自身が開発途上国の実際を自らの目と耳で見聞し、何かを感じることがより大事であるという考えに至り、このスタディ・ツアーを実施することになりました。通常の旅行では、名所旧跡巡りとホテルの宿泊を繰り返すだけで、途上国に暮らす人々の実際を見聞きすることはほとんどできません。このスタディ・ツアーの特徴は、現地の研究機関や NGO と計画段階から関わり、農村地域でのプロジェクトを紹介していただき、そのプロジェクト・サイトを訪ね、そこに暮らす人々の交流の機会があることだと思います。

日本で紹介されるインドは、先進国を襲った金融ショックにもかかわらず堅調な経済成長を遂げている経済新興国の一つとしてのインドであり、グルガオンなどの新興地域で先進国並みの生活を始めたミドルクラスが躍進するインドです。インドには、日本企業にとっての大きなビジネスチャンスが広がっていると喧伝されています。娯楽番組は、屋根や荷台にまで乗客が満載の鉄道やバスをおもしろおかしく取り上げています。ターバンを巻いていたインドの首相が交代したこと、日印首相の訪日訪印、インドで起きた邦人女性に対する性的暴行事件、首都デリーの大気が北京以上に汚いことをニュース番組で見た人も多いことでしょう。しかしその報道量は、お隣の中国や北朝鮮に関するものとは比べものにならないくらい少ないのが実際です。

語学教育においても中国語を学ぶ学生の数に比べれると、ヒンディ語を学ぶ学生の数は著しく少ないのが現状です。大学受験で世界史を選択しなかった学生は、インド独立の父ガンジーの名前すら忘れているかもしれないですし、独立後の初代首相がガンジーではなくネルーであることを知る学生はほとんどいないと思います。インド第 5 代首相のインディラ・ガンジーがネルーの娘であってあのガンジーの親戚ではないことを聞いて驚く人も多くいます。また、経済学を学ぶ学生の中で開発経済学をメジャーにする学生の割合も欧米に比べると極めて少ないようです。お隣の中国と比べると、日本人にとってインドは物理的な距離以上に遠い国なのだと思います。

新保ゼミの学生達は、『貧困の終焉』(J. サックス著)、『傲慢な援助』(W. イースターリー著)、『貧乏人の経済学』(A. バナジー、E. デュフロ著) を読破してゼミに入りました。入ゼミ後には、ゼミと授業で開発経済学を学び、インドに関する数々の書籍や論文を読み、国民所得統計や家計や事業所のマイクロ・データ，国連・世銀銀行などの社会経済統計にじかに触れてきました。そのような経験から、インドの人口構造、国民所得、産業構造、貧困率、就学率、平均寿命などの数値的な姿について、インドでは 70% 以上の人口が農村に暮らし、様々な指標は都市と農村では同じ国の部分とは思えないほどに違い、農村はまさに開発途上国の姿にほかならないことを知り、インドの繁栄はとても不確実なものではないかと感じています。

しかし決定的に欠けているのは、J. サックスが『地球全体を幸福にする経済学』の最終章「力を合わせて(Power of One)」で記している、世界市民の一人の人間としてできるかぎり真実を知ろうとする努力ではないでしょうか。J. サックスは、世界平和と持続的開発を達成するために、私たち一人ひとりができることの一つとして「旅」の重要性を強調しています。

> 異なる土地や文化にじかに触れることは、共通の関心や願望をわかりあい、その土地特有の問題を理解するのに最良の手段である。・・・運がよければ海外へ出かけることである。学生にとっては、特別なチャンスになるだろう。キャリアを築くきっかけになることもあり、また一生を賭けられる情熱の対象が見つかるかもしれない。海外で働くことは新鮮な経験になるだろう。・・・若者にとって、未知の異文化に接し、ひどい貧富の差を知ることは貴重な経験である。地球の汚染、水ストレスに苦しむ地域、気候変動の脅威を自分の目で見ることができる。・・・留学は人生の転機になり、人生を変えることもある。チャンスがあれば、ぜひ経験しておこう。旅行は、外の世界に向かって開かれた窓というだけではなく、将来に通じる窓でもある。なぜなら、グローバル化が進み、新興市場の勢いが増すことによって、今後は海外との結びつきがさらに緊密になるからだ。(J. サックス『地球全体を幸福にする経済学』、452-3 頁より抜粋。)

ただし、旅行する前提条件は、「現在の課題について知ること。持続可能な開発の基礎になる科学にくわしくなろう。学生ならば、環境、開発経済学、気候変動、公衆衛生、その他、関連領域の授業を受けるとよい。」(同掲書、452 頁) と言っています。その意味で、新保ゼミの学生は、インドを旅する資格を持った学生たちということができます。

開発途上国を旅するこは、日本国内を旅することとは全く異ります。飲料水と食べ物に起因する A 型肝炎や赤痢などの感染症や、蚊を媒介とするデング熱などの感染症というリスクだけでなく、トイレや宗教など生活習慣の違いに起因するリスクをも想定しなければなりません。これまで大過なくスタディ・ツアーを実施できたことは、ツアーに参加したみんさんが、そのことをよく理解し行動した結果にほかなりません。今後ともスタディ・ツアーを継続するために、旅で得られた経験を後輩と共有し、ますます安全に十分配慮し、事前の準備を十分にしてより実りある旅にしていきたいものです。

スタディ・ツアーは多くの方々に支えられてきました。今年のツアーでは SWYAA-India の Mr. Ravi Chopra さんと Ms. Shobhana Radhakrishna さんに計画の段階から様々なご提案をいただき、訪問先との日程調整、そして二日間わたってわれわれの活動に同行していただき大変お世話になりました。SCRIA Khori Center の Mr. Sunder Lal さんには、Kohli 村を訪問した際に三日間にわたり貴重な時間を頂戴してわれわれにお付き合いいただきました。DISHA の Mr. Ramesh Kumar さんには、Delhi の Government School と Open School での活動とスラム・ウォークに同行していただきました。同じく DISH の Ms. Rekha Vohra さんには、Jaunti 村での活動をアレンジしていただき、現地の案内までしていただきました。これらの方々に、ここであらためて感謝の意を表する次第です。

India Study Tour は私のインドの友人である Rajnish Sinha さんの協力なしには成り立たないことを申し添えておかねばなりません。毎年六月を過ぎると Sinha さんからの連絡で私のツアー仕事がスタートします。現地での宿泊と移動の手配はすべて Sinha さんにお願いしています。日本を出国する寸前まで密に連絡を取り合い、現地に入ってからもわれわれのツアーが安全に進行するように常に気を配っていただいています。参加者のお腹の調子が悪くなったときに、Sinha さんの薬の問い合わせの電話の向こうにいるのは奥様 Meenakshi さんです。われわれのスタディ・ツアーを長く続けるためにも、Sinha さん御家族が健康であることが何よりです。この場を借りて、Sinha さん御一家にお礼申し上げるとともにますますの健康をお祈りする次第です。

最後に，新保ゼミの学生達にとって、このスタディ・ツアーが将来の大きな糧になることを期待します。また、このツアーおよびゼミでの経験をきっかけに、何らかの形で持続的開発にかかわる仕事を職業に選択する若者が増えるならば、それは小生の一大楽時であります。

三田山上にて

慶應義塾大学商学部教授

新保 一成

目次

序 1

第 1 章　インドの女性問題 7

1.1　SCRIA 7

1.2　Jaunti 村 14

第 2 章　学校教育 17

2.1　はじめに 17

2.2　インドの学校制度・現状 17

2.3　インド教育の実態 19

2.4　総括 23

第 3 章　持続的開発 27

3.1　はじめに 27

3.2　カースト差別 27

3.3　安定した雇用について 29

3.4　持続可能な食料体制 (モンスーンの不調などに弱い現在のインドの農業状態などの見直し) . . 31

3.5　水の持続的開発 33

3.6　まとめ 36

参考文献 38

感想 39

2015 India Study Tour **旅程表** 47

表目次

1.1 各国の女性議員の割合 13

2.1 インドの学校制度 18
2.2 生徒の通う学校の内訳 19
2.3 初等学校に就学する児童の学力調査 21
2.4 不意打ち調査による学校種別教師欠勤状況 22
2.5 不意打ち調査による州別教師欠勤率 22

図目次

1.1 SCRIA コーリー・センター前にて 7
1.2 ハリヤーナ州リワーリー県コーリー村の女性たち 8
1.3 出生時の男女比率 (推定値) 9
1.4 牛糞燃料 10
1.5 学校での交流 11
1.6 全インド、デリー、ハリヤーナー州 (北部)、ラジャスターン州 (西部) の年齢グループ別男女別就学率 12
1.7 女性の政治参加 13
1.8 Jaunti 村にて 14

2.1 オープンスクールでの実際の授業風景 19
2.2 上級中等学校の生徒達との交流会の様子 23
2.3 1 ヶ月あたり 1 人あたり消費支出 10 分位階級別の 5-29 歳生徒 1 人あたり教育支出 24
2.4 農村都市別年齢階級別初等学校以上通学率 25
2.5 男女別年齢階級別初等学校以上通学率 25
2.6 5-29 歳人口における社会グループ別就学率・通学率の分布 26

3.1 スラム・ウォークにて (1) 29
3.2 SCRIA における雨水の貯蔵 32
3.3 水ストレス 33
3.4 ミレット畑 34
3.5 コモンズとしての貯水池 35
3.6 スラム・ウォークにて (2) 37

第 1 章

インドの女性問題

小野 州
須賀 健太
鈴木 浩太
火口内 愛
水野 加奈子

インドをはじめとする開発途上国では女性差別は根強く続いており、深刻な問題になっている。今回、本研究会で決行した India Study Tour では、ハリアナ州の NGO 団体 SCRIA と政府指定の農村発展モデル村である Jaunti 村を訪問し、女性差別の現状や女性の地位向上への取り組みを実際に見ることができた。本章は、現地で実際に調査した情報や事前学習及び事後学習から得た情報元にをもとに作成したレポートである。

1.1　SCRIA

Study Tour の 2~4 日目はインド北西部にあるハリアナ州に滞在した。ハリアナ州で活動する NGO 団体 SCRIA に訪問し、ハリアナ州を初めとするインドの農村部に根強く残る様々な問題や、それらに対する NGO の活動についてお話を伺ったり、施設や周辺の村に訪問して現地の方に直接触れ合い、インタビューなどを行った。SCRIA の活動内容は大きく分けて、

図 1.1　SCRIA コーリー・センター前にて

右が SCRIA の最高責任者ラルさん (撮影 筆者、2015 年 9 月 7 日)

1. Woman employment
2. Local governance
3. Live stock
4. Round water registration natural resource

の 4 つである。その中でも特に 「1. 女性の地位向上」に力を入れていることがお話を聞いてわかった。ここでは、現地で実際に SCRIA の責任者であるラルさんやチームリーダーの方々からお話を伺った、インド全体やハリアナ州の女性差別の現状やそれに対する SCRIA の女性の地位向上活動について、私たち自身で調べた情報を

織り交ぜながら述べていく。

1.1.1　ハリアナ州の男女比率

ハリアナ州の人口の男女比率は男性 1000 人に対して女性は 890 人であるとのことだ。さらに 0~5 歳人口の男女比は男の子 1000 人に対して女の子 700 人であるという。(一般的に、女の子の方が生命力が強く、男の子は小さいころの病気に弱く生まれてから亡くなってしまう子が多いため、成人での男女比は幼児での男女比より差が縮まる傾向がある。) この数字から言えることは、ハリアナ州では「選択的堕胎」が行われているということだ。つまり、妊娠中に女の子だとわかったら、生まない選択をとるという女の子への差別が存在するということである。インドでは、男の子によって家系が引き継がれるという認識があるため、家にとって男の子は不可欠である。しかし、男の子が生まれるまで女の子をみんな育てられる経済的余裕はないため、女の子の堕胎という選択となるのだ。

図 1.2　ハリヤーナ州リワーリー県コーリー村の女性たち

女性互助グループの会合にて (左)。子どもたちと (右)。(撮影 筆者、2015 年 9 月 8 日)

インドの女性差別については、Dréze and Sen (2013) を参考文献として読んだ。同書から抜粋した以下の図は、インドの州ごとの出生時の男女の人口比率を示している。各州の男女比率を見てみると、男児 1000 人に対して女児 940 人という割合が、女の子の選択的堕胎が行われている分割線となるようだ。この分割線を地図上に引いてみると、東南部では性別の選択による女児の堕胎の影響が小さく、北西部性別の選択による女児の堕胎の影響が大きく、女児差別が深刻であることがわかる。私達が訪れたハリアナ州は、男児 1000 人に足して女児が 842 人と、インドで最も女の子の選択的堕胎が多い州である。私がハリアナのある村で村の子供たちと交流をしている際、小学校中学年くらいの女の子に、はっきりとした英語で「あなたの国では男女差別がありますか?」と聞かれたことが今でもとても鮮明に覚えている。ハリアナに住む女の子たち自身も自分たちの住む地域がそのような男女差別が深刻であることを、自覚しているようであった。現在は新しい設備などにより選択的堕胎が以前よりも容易になり、今後は北西部だけでなく東南部にも選択的堕胎が増えていく恐れがある。現に、東南部に位置する Jharkhand 州や Odisha 州ではすでに近年人口における女性の比率が下がりつつ

あるのだ。このような警告を深刻に受け取るべきだと同書は述べている。

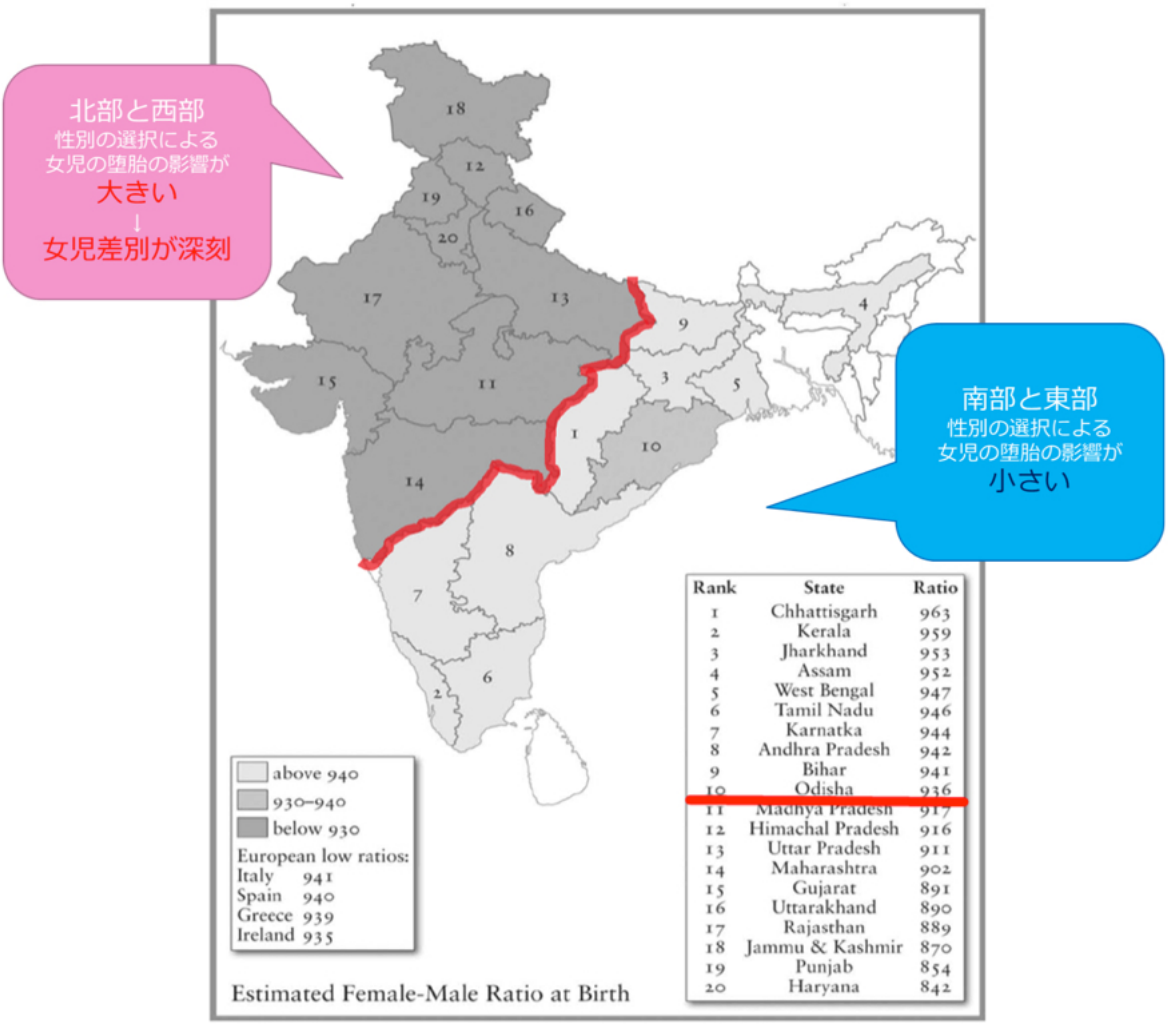


図 1.3　出生時の男女比率 (推定値)

Dréze and Sen (2013)、237 頁を引用。吹き出しと赤線は筆者。

また、このような女の子の選択的堕胎の結果、将来的に男性に対して女性の人数が足りなくなっていることが、インドで重大な社会問題となっているレイプ問題の一因となっている。同書では、インドでのレイプ問題について次のように述べられている。2012 年 12 月 16 日にデリーで起きた gang-rape 事件がきっかけで、女性へのレイプやハラスメントに関する安全性の欠如と脆弱性が今までにないほどに国民的な問題となっている。今までは女性への暴力やレイプの問題について注目されることもなかったが、新聞がレイプの報道手段としてスペースを確保し取り上げるようになった。つまりこの事件が権利のない女性をより保証していく転換点となったのである。インドのレイプ発生率は、10 万人あたり 1.8 人と、他国と比べると低いかもしれない (アメリカ: 27.3 人、イギリス: 28.8 人、スウェーデン: 63.5 人、南アフリカ: 12 人、Dréze and Sen (2013)、228 頁)。しかし、インドで発生率よりも深刻な問題なのは、被害者が警察や法制度のサポートをほとんど受けてい

ないことであるという。つまりこれはレイプ防止計画の欠落を示しているのだ。「レイプ問題の根底は、無頓着な警察、劣悪な治安管理、無機能な司法制度、究極的には、無頓着な社会に原因がある」と述べられている。

1.1.2　女性の労働負担

人口が爆発的に増加するインドでは、村人の日々の生活を支えるだけの薪炭を供給するのは物理的に不可能なこともあり、伝統的に牛糞などの家畜の糞を燃料として利用している。家畜糞は、村落部だけではなく都市郊外でも、燃料として用いられ、祭祀などでは都市中心部でも燃やされている。Study Tour 5 日目に訪問したデリー郊外にある Jaunti 村でも、実際に牛糞燃料が保存されている施設を見せていただいた。今回訪れた SCRIA の施設内にも牛糞を壁の材料にしてつくられた建物を見させていただいた。牛糞の壁は、夏は涼しく冬は暖かいという。このような家畜糞の活用は森林伐採を抑制し、バイオ燃料としても注目されている。

図 1.4　牛糞燃料

貯められた牛糞燃料 (左、2015 年 9 月 11 日)。牛糞で出来た SCRIA の集会施設 (右上、2015 年 9 月 7 日)。牛糞燃料を貯蔵している家屋 (右下、2015 年 9 月 11 日) (撮影 筆者)

しかし、この生活に欠かせない牛糞燃料を作るのは、まさに女性の仕事であるのだ。燃料となる家畜糞は、乾燥する前に集め穀類などの植物残滓と混ぜ合わせ、よくこねて円盤状に成形する。家族の生活に必要な牛糞燃料を作るには、女性にとってかなりの時間が割かれ、労働負担が大きい。また、牛糞燃料を用いた調理が狭い室内で行われることが多いため、調理中の煙によって女性への健康被害も危惧されている。牛糞燃料は PM2.5 排出量が、薪よりも高く呼吸器系の疾患リスクが高まる危険もある。SCRIA で伺ったお話によると、ハリアナ州では LPG 燃料の普及が増え、家の照明に使われる燃料分の牛糞燃料を作る労働時間は短縮されたという。しかし、牛乳を温める・チャパティを作る作業等はまだ牛糞を使う伝統があり、女性の労働時間は短縮されていないとのお話であった。この牛糞を作る作業とそれを使って料理を作るという仕事だけで、女性の生活時間の多くを費やすことになる。SCRIA の付き添いのもと、ハリアナ州内のリワリー村に訪問した際、

お昼の時間帯には多くの現地女性の方々が私達のもとに集まって来てくれたが、夕方が近づくと既婚していると思われる女性たちがすっかりいなくなってしまった。おそらく、料理や家の仕事のために帰ってしまったのだろう。

1.1.3　女の子への教育機会

ラジャスターン州では女の子は学校に通えないが、ハリアナ州では教育の内容、設備が整っており、女の子もほとんど学校に通えているとのお話であった。ハリアナ州は、デリーから比較的近くヒマラヤからの水の運河設備も良いという。それに比べて、ハリヤナ州の隣のラジャスターン州は、デリーから遠くヒマラヤからの水も通っていない。これらのことから、女の子が学校に通えるかどうかは、デリーからの距離や水へのアクセスと相関も持つかもしれないという仮説も立てられる。

図 1.5　学校での交流

デリーの初等学校の第 3 学年 ~ 第 5 学年の女子児童と (左、2015 年 9 月 10 日)。ジャウンティ村の上級中等学校の女子生徒と (右上、2015 年 9 月 11 日)。(撮影 筆者)

下のグラフが示す通り、ハリアナ州はデリーやインド全体に比べて就学率が低いことがデータからもわかる。さらにラジャスターン州に至っては、11~13 歳の女の子の就学率が極端に低く、女児差別の深刻さが伺える。

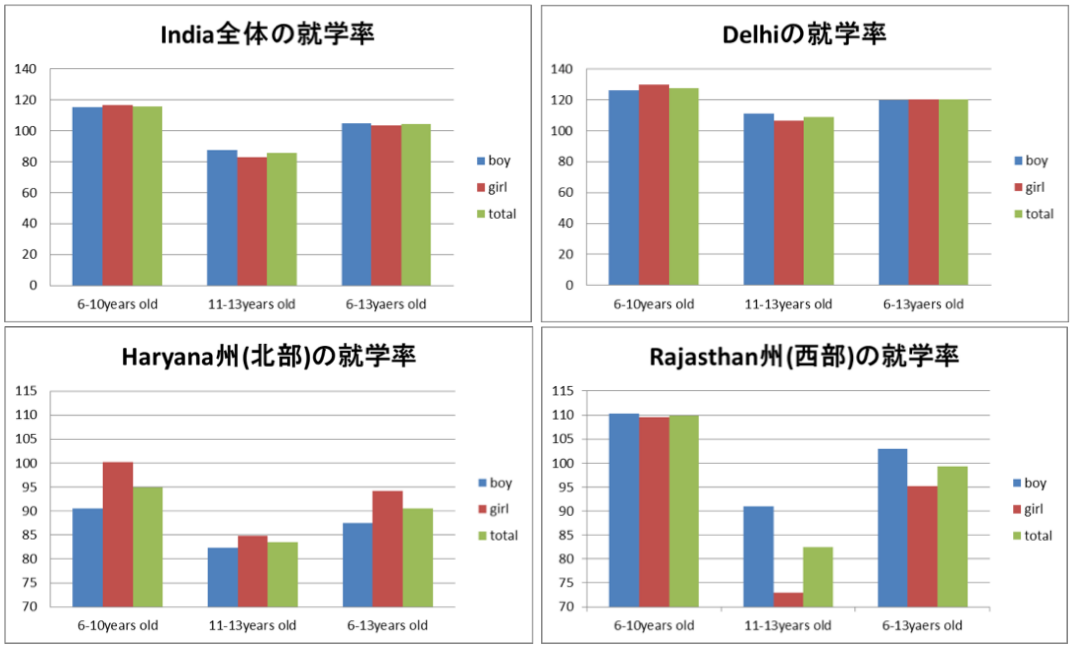


図 1.6　全インド、デリー、ハリヤーナー州 (北部)、ラジャスターン州 (西部) の年齢グループ別男女別就学率

Parliament of India RYAJA SABHA より作成

1.1.4　女性の政治参加

SCRIA のラルさんの話によると、インドの国会の女性議員比率 30% 目標であったが、18 年間可決されず無視されてきた。地方議会では、1994 年に女性議員比率が必ず 32% でなければならないという法律ができた。しかし、女性は外で顔すら出せないという時期が長かったため 32% という目標を決めても、なかなかすぐには外に出てこないというお話であった。つまり、単に制度だけを変えるだけでは、慣習や文化が邪魔をするのである。そこで、では制度を変えるだけでなく、どうしたら実際に女性が社会進出できるかを考えるのが SCRIA の活動であるという。例えば、女性はひとりで社会進出をするのは難しいため、SCRIA が女性のグループ結成を促進することで、少しずつ女性の政界進出が増えてきたという。その他にも SCRIA は、1994 年のアクションとして、

1. 5 年に 1 度選挙
2. パンチャヤット (インドの農村に古代からある伝統的な自治機関) の確立
3. 32% を女性議員とする
4. 選挙が政府と独立して行われる

などの取り組みがある。

表 1.1　各国の女性議員の割合

順位	国	女性議員の割合
1 位	ルワンダ	57.5%
2 位	ボリビア	51.8%
3 位	アンドラ	50.0%
95 位	アメリカ	19.5%
143 位	インド	12.2%
147 位	日本	11.6%

世界統計格付けセンターより作成

2016 年 2 月 23 日現在のリンク

表 1.1 が示すように、インドの女性の議員比率が 12.2% で世界 143 位という結果である。しかし日本がインドより下の 147 位という結果にも驚きである。女性の社会的地位の向上には女性議員比率の向上は必須であるだろう。インドも日本も女性議員比率の向上に努めていきたい。

1.1.5　女性問題に対する SCRIA の活動・解決策

以上で見てきたような、女性に対しての選択的堕胎、労働負担、教育問題、政治参加などの女性問題の根本には、インドに古くから続く慣習的な偏見があるとラルさんは語っていた。具体的には、女性自身に own identity がない、男性が女性を商品として扱っている、神は男の次に女を作ったとインド人は信じているなどの偏見がインド全体でもともとあるのだと教えてくれた。そのような偏見によって、例えば女の子は小さいときから家の手伝いをさせられたり、食事の量が少ないなどの差別が生じる。それでは、このような根本的な問題に SCRIA はどうアプローチしていくのか。ラルさんが語ったことは、次のようなことであった。

図 1.7　女性の政治参加

ハリヤーナ州リワーリー県ムセプール村での集会にて。多くの既婚女性は外出時にプルダで顔を覆っている。(撮影 筆者 2015 年 9 月 8 日)

- 小さいころから女の子と男の子は平等だ! という mindset を持たせる
- 女性にも権利がるあることを気づかせる
- 女性に自信を持たせるための能力をつけさせる
- グループ、集団的な行動
- 女性に micro finance を通じて収入を得る手段を提供（女の子を選択中絶してしまうのは、女性が自分で育てる income がないからでもある。）
- 女性が政治に参加促進
- 女性を守る憲法があること、グループの力を利用

すること、micro finance など、女性を守る存在を女性に教える機会を提供
- 警察などに女性だけで構成する部署をつくることで女性が直訴しやすくする
- 男性の理解を得るためには会話による説得を行う

インドのなかでも特に女性差別が深刻なハリアナ州において、このような活動は大きな効果を持つだろう。SCRIA の活動による、ハリアナ州の更なる女性の地位向上に今後も注目していきたい。

1.2 Jaunti 村

Study Tour6 日目は、デリー北西部にある Jaunti 村に訪れた。Jaunti 村は Modi 政権のガイドラインに基づいて、農村開発のモデル村に選定されている。インドの実際の農村で発展というものがどのように行われていくのか見ることができる、とても貴重な機会となった。この村では、訪問日のわずか 3 日前に結成された、女性の自助団体の方々 20 名ほどにお集まりいただき、インタビューを行った。

図 1.8　Jaunti 村にて

デリー郊外の農村地域で、電気にもアクセスでき、全世帯にトイレもある。(撮影 筆者、2015 年 9 月 11 日)

村の女性のうち、この自助団体に参加しているのは、60/1000 人ほどで、結成からわずか 3 日目ということもあり、団体としてはまだまだこれからであるようだった。3 日間ですでに何か活動を行ったか伺ったところ、具体的な活動はまだないという。しかし、グループが結成されて、女性がここに集まっていること自体が大きな進歩であり大事なことであると女性たちは語ってくれた。今後は毎週金曜日に 2 時間 NGO が来て、**女性がオープンマインド**できる機会ができる。具体的な活動よりも、今までになかった女性がオープンマインドできる機会を持てることが大きな進歩であると、生き生きとした表情で語っていたのが印象的である。また、私達がインタビューを行っている間、村の男性たちが周りに立って終始様子を伺っているようだった。そこで、周りの男性たちに対しても、女性たちのこのような活動についてどう思っているか聞いたところ、賛成であるとのことだった。男性は、女性にとっての幸せは家族全体、また村全体にとっての幸せに繋がると話してくれ、女性の社会的地位の向上に対して私達が予想していたよりも肯定的だと感じた。自助団体の女性たちに、将来に向けて夢や希望は何かあるか聞いたところ、まずはこのグループを大きくするために参加しやすい機会を増やしていきたいという。そして、このグループをもっと強くして、村全体、さらには他の村にもこのような取り組みを広げていきたいと語ってくれた。また、この質問に答えてくれた、ある女性個人としては、既婚女性が他の男性に顔を見られないようにつけなければいけないフェイスカバーの慣習をなくしていきたいという具体的な目標も語ってくれた。たしかに、農村では女性はほとんどフェイスカバーをしていて、特に既婚者の女性は、わたしたち女性には顔を見せて挨拶をしてくれが男性メンバーが現れた瞬間顔を隠す場面などが多々あった。こういった女性の地位の低さを表す様々な慣習がなくなっていくことが彼女たちにとっての目標なのであろう。

それでは、この Jaunti 村で行われている Modi 政権による農村開発計画 (SAGY) について詳しくみていこう。Jaunti 村では、以下の説明するような具体的な活動の実態のすべてを見ることはできなかったが、今後は活動の成果に注目していきたい。

1.2.1 SAGY とは

インドの首相ナレンドラ・モディ氏は、2014 年 10 月 10 日に、農村部の全体的発展のための新しいスキーム、“Saansad Adarsh Gram Yojana” (SAGY) を開始することにした。これは、3 つの村について、すべての議員が 2019 年までに一定水準の物理的発展とインフラ整備についての責任を持つという新しい試みである。このスキームのゴールは、3 つのモデルとなっている村を 2019 年の 3 月までに、そのうちの一つは 2016 年までに一定水準までに発展させることである。その次は、2024 年までに 1 つずつ選ばれた村が同じように続く。このスキームは、農村部の人々の良い心はそのままに、そこに住む人々にとって必要な文化的設備へのアクセスが可能になり、結果彼らの生活が向上するようにという目的のもとに開始された。具体的な活動を SAGY ガイドライン (Government of India (2014)) より抜粋すると以下の通りである。

インド政府の活動

国家的レベルで計画を達成するための大臣は、地方政府の大臣である。計画を監視するために、二つの国家レベルの委員会がある。一つ目は、大臣によって地方政府によって開催される。二つ目は地方政府の議会によって行われる。委員会はこの計画の中心地域の専門家を推薦する。頼りになる 3 人から構成される、小さく、力があって大きなインパクトのある議会が助けてくれる。委員会の仕事は、鑑識とプランニングの過程を監視する。計画の実行の振り返り、共同監視体系を決定する。障害や問題を特定し、この計画のガイドラインの変更を含めて必要な場合は問題を治すための行動に着手する。ビデオや紙を通じて、ベストのやり方を普及させる。運転可能なガイドラインを発する。

社会発展のための SAGY の活動

明るく仲のいい村社会をつくるために、

1. ボランティア主義の促進活動
2. 人々が十分に参加し、地方発展に貢献できるための機会をつくる
3. 村の年長者や、女性、自由をもとめて戦ったもの、殉教者を敬う活動、
4. 暴力や犯罪からの解放
5. スポーツや大衆アートのフェスティバル
6. 人々のプライドを盛り込んだ村歌をもつ
7. 村の日を祝う
8. 市民教育を組織する
9. 地元の歴史を再三主張し、村の日を定める
10. 異なるグループが村の精神を反映した新しい歌をつくり、村の歌を決める
11. 大衆音楽やインドの多様性を反映した祭りをはじめる

経済発展のための SAGY の活動

1. 持続可能な農業とオーガニックな農場
2. オーガニック農場の技術を農民のグループ特に女性につたえる

自助団体の結成

- 狙い: 女性自助団体の結成は、女性の生計に力をあたえることから、金融的包括へと変化させる二重の結果をもたらす絶対戦略である。モデル村はすべての社会団体や経済状況をもつ女性に、銀行とのつながりをもたせる。
- 戦略:
  1. 女性自助団体の全メンバーは、PMJDY 銀行の個人口座を持てることを保証する。
  2. 銀行との連携
  3. 女性自助団体を組織し、機能させる
  4. 銀行個人口座の開設
  5. 銀行提携を行う
  6. 合弁会社をつくる
- 目標: 家計の経済力を強めることによって、収入を増やす。貯蓄の習慣を教え込む。

第 2 章

学校教育

上野 卓哉
海住 武司
中村 まゆら
東 克洋
前田 竜
柳本 祐介

2.1 はじめに

この章ではインドの教育について述べていく。インドの教育というとインド式計算法など計算への強さや、優秀層が多いという印象が一般的に強い。実際に大学をはじめとした高等教育のレベルの高さや IT 産業への強さは世界屈指である。だが、国土全体を見渡すと人口増加や、貧困・男女間格差などとは無関係ではなく、教育レベルの低さや格差が問題となっている。実際に調べてみると識字率や基本的な学習事項の理解度の低さに驚かされた。この章ではそのインド教育の二面性がある中で、実際に見て、触れた教育レベルの低さや抱える問題といった一面に対し現状や問題、現地での体験を踏まえて述べていく。

2.2 インドの学校制度・現状

2.2.1 インドの学校制度

インドの学校制度は原則表 2.1 のとおりである。初等教育 (初等学校・上級初等学校)8 年が義務教育となっており、2002 年の憲法改正及び 2009 年の無償義務教育権法により初等教育の無償化が制度上は保証されている。

表 2.1　インドの学校制度

インドの学校	年数
初等学校 (Primary School)	5 年
上級初等学校 (Upper Primary School)	3 年
中等学校 (Secondary School)	2 年
上級中等学校 (Senior Secondary School)	2 年
高等教育機関	4 年 ~

中等教育 (中等学校・上級中等学校) は 4 年設けられており、10 年生 (中等学校 2 年)・12 年生 (上級中等学校 2 年)、次に全国共通テストが実施され前者の結果で普通教育 (上級中等学校)・職業教育 (工業学校) に進路が分かれる。また後者の試験は日本で言えば大学入試センター試験にあたるものであり、この試験結果で進路先の大学が決まる。

高等教育は国立大学・みなし大学・州立大学・カレッジの 4 種に分かれるというが、このレポートでは説明を割愛する。

2.2.2　学校の種類

学校運営のあり方から以下のように分類される。

- Private(Public) School: 政府からの補助の有無で Private aided と Private unaided に分けられる。前者は私立ではあるが、補助を受けているため政府の規制下にあり、後者はその反面政府から全く独立しているという特徴がある。通常、都市部では中間層以上の子供は私立校に通うのが一般的であるという。
- Government School: 日本で言う公立校。制服や教科書は支給され環境は整ってきているが、その財源は州の予算で賄われているため地域によって設備の質に差が生まれているという。
- Open School: ここまでの学校とは異なり、正規の学校教育を受けられない児童 (スラム街に暮らし、家業の手伝いなどから学校に通うことのできない子供たち) のための非公式なノンフォーマル教育を体現する学校である。実際には NGO 団体などによって簡素な建物などで運営されている。

図 2.1　オープンスクールでの実際の授業風景

小さな黒板や机・いすはなく、簡素なカーペットの上に座って授業を受けていた。デリー西部のナンガルラーヤ地域にある DISHA の活動拠点にて。
(撮影 本橋 加奈子。2015 年 9 月 10 日)

表 2.2 に示したように、学校に通う 73% の児童が Government School に通っている。また、1996 年に実施された第 52 回国民標本調査によれば、家計支出が下から 20% の家庭の児童の 90% は Government School に通っていることが示されている。

表 2.2　生徒の通う学校の内訳

小学校の種類	割合
Government School	73%
Private aided	7%
Private Unaided	20%

NSSO (2010) より作成。

このデータや事実から、低所得者層の家庭の児童ほど公的な学校に就学していることがわかる。また、私立学校のレベルや質にも地域や学校ごとに異なるため一概に私立学校が優れているとは言えない。

2.2.3　その他の特徴

インドの公的教育は憲法により、基本的に国家ではなく各州の担当となっていることが挙げられる。1976 年の憲法改正により、中央議会が教育に関する立法を担当し、1986 年に国家教育政策により中央政府が初等教育の一部分を負担することとなった。現在、初等教育支出は州と中央政府が 9 対 1 となっており、全額を国が負担する日本などとは異なる教育体制となっている。

2.3　インド教育の実態

私たちはインドで public school、government school の生徒たちと交流した。そこで聞いた話と現実とのギャップについて、教育の質・男女区別という 2 点から考察する。

2.3.1 教育の質

Public school と government school の違い

軍人階級が多く住むハリアナ州のある村で public school に通う子供たちと交流した。その村の子供たちは public school が出来る前、村から遠い government school に通っていたが、村に public school が出来たことで進学率が大幅に改善した。私たち相手に大学での専攻についての質問が飛び交い、こちらの英語に理解を示すなど、教育への関心の高さがうかがえると同時に彼らは public school に通い質の高い教育を受けていることを誇りにしていた。一方で次に訪れた government school は public school の生徒よりもテストで良い成績を取っていることを誇りにしており、あくまで public school よりもレベルの高い教育をしていると主張していた。しかし、その場においては government school の生徒の方が英語の理解度が低いように感じた。実際に、一般的には government school よりも資金の充実した public school の方がレベルの高い教育を行っており、裕福な家庭ほど設備・教師の質・英語学習に優れた public school に通っている。表 2.3 の水準がインド教育の現状である。

表 2.3　初等学校に就学する児童の学力調査

調査	調査年	調査対象	学年 / 年齢	学力に関する観察事実
India Human Development Surveys	2004-5	大規模、全インド、無作為抽出、政府系初等学校	8 – 11 歳	∘ 50% だけが、3 文からなる簡単な文章を読むことができる。 ∘ 半分以下 (43%) が、2 つの 2 桁の数字の引き算ができる。 ∘ 3 分の 1 以上 (36%) が、「私のお母さんの名前は Madhuben です」といような簡単な文章を書くことができない。
ASER Survey	2011	大規模、全インド農村部	第 3~5 学年	∘ 58% の児童だけが、第 1 学年の教科書を読むことができる。 ∘ 半分以下 (47%) の児童が簡単な 2 桁の引き算ができる。
			第 5~8 学年	∘ 50% の児童だけが、カレンダーを使うことができる。
PROBE Revisited	2006	ヒンディ語圏、284 農村地域、政府系初等学校	第 4~5 学年	∘ 37% だけが流暢に話すことができる。 ∘ 半分以下 (45%) しか 20 割る 5 の計算ができない。 ∘ 3 分の 1 が、繰り上げのある足し算ができる。
CORD-NEG Village Studies	2010-11	ビハール州、ジャールカンド州、オディシャ州の周縁県 9 村の政府系小学校児童、110 人無作為抽出	第 4~5 学年	∘ 50% が 2 桁の数字を認識できる。 ∘ 4 分の 1 以下が、2 つの 2 桁の引き算ができる。
WIPRO-EI Quality Education Study	2011	5 つの大都市 (バンガロール、チェンナイ、デリー、コルカタ、ムンバイ) の 83 の一流校に通う 2 万人以上の児童	第 4 学年	∘ 読解力、計算力は国際標準以下である。 ∘ 16% だけが、定規で鉛筆の長さを測ることができる。
			第 6 学年	∘ 22% だけが、丸めた紙の重さが変わらないことを理解している。

Dréze and Sen (2013) の Table 5.2(122-23 頁) を訳出。

教師の欠勤

私たちが訪れた government school には村ごとに選定されたメンバーで構成された Education management committee があり、学校方針やお金の使い方について学校に助言し、学校がしっかり機能しているかどうか監視する役割を果たしている。このおかげで教師が学校に来ないという問題も見られなかった。しかし実際にはインド全体で public school、government school に関わらず、教師の不足、さらに学校は教師の独壇場で度重なる欠勤が大きな問題となっている。表 2.4、表 2.5 はインド国内のランダムに選ばれた 3000 校以上の学校を

対象に行われた調査の結果を表している。この調査より学校の種類にかかわらず、学校に行ってさらに授業をしっかり行う教師は半数にも満たず、特にインド北部でその傾向が高いことが明らかとなった。教育の質を向上させるにもまだまだ教育整備への資金が不足しているのがインド教育の現状である。

表 2.4　不意打ち調査による学校種別教師欠勤状況

	公的学校	非正規学校 援助有り	援助有り私立学校	私立学校
欠勤率 (州別の加重平均)	24.8%	28.0%	20.1%	22.8%
教育活動従事率	44.8%	42.9%	58.8%	48.5%
標本の大きさ	34525	393	3371	9098

欠勤率は、不意打ちの学校訪問時に欠勤していた教師の割合を示す。教育活動従事率は、本来教育活動に従事していなければならない時間帯に活動していた教師割合を示す。

Kremer et al. (2005) の Table 3(661 頁) を引用。

表 2.5　不意打ち調査による州別教師欠勤率

州	欠勤率 (%)	州	欠勤率 (%)
マハーラーシュトラ	14.6	西ベンガル	24.7
クジャラート	17.0	アーンドラ・プラデーシュ	25.3
マディヤ・プラデーシュ	17.6	ウッタル・プラデーシュ	26.3
ケララ	21.2	チャッティースガル	30.6
ヒマーチャル・プラデーシュ	21.2	ウッタラーカンド	32.8
タミル・ナードゥ	21.3	アッサム	33.8
ハリヤーナー	21.7	パンジャーブ	34.4
カルナータカ	21.7	ビハール	37.8
オディシャ	23.4	ジャールカンド	41.9
ラージャスターン	23.7	加重平均	24.8

欠勤率は、不意打ちの学校訪問時に欠勤していた教師の割合を示す。

Kremer et al. (2005) の Table 2(660 頁) を引用。

2.3.2　男女区別

Public school、government school に関わらず、男女別のクラスに分けられ、かつ授業時間帯を変えるなどして男女の区別が明確にされていた。Government school で生徒からの質問を受けた際には、こちらが回答するときも女子生徒に対しては女子のみ、男子生徒に対しては男子のみしか答えてはいけないという事実が衝撃的でもあった。学校としては女子の教育にも力を入れており、進学率も年々上昇、高校卒業後女子生徒のみ専門学校なら無料で進学できるなどの制度もあることを強調していた。しかし多くの学校で問題となっているというセクハラ問題、また話を聞く際に節々に感じた男性中心の様子から、教育の現場にはやはりインドにおける

カースト制度、はたまた女性軽視も関連しているように感じた。

図 2.2　上級中等学校の生徒達との交流会の様子

ジャウンティ村の上級中等学校の第 10 学年 ~ 第 12 学年の生徒たちとのミーティングにて。男女が完全に分かれている。(撮影 柳本 祐介、2015 年 9 月 11 日)

2.4　総括

現地での体験や参考文献を通じ、インドの教育に関する問題はひとえに「教育レベルの格差」にあると感じた。それをもたらす原因としては

1. 教育環境の未整備
2. 地域格差
3. 男女差別
4. カースト差別

の 4 点が主な原因であろう。

1 点目は先に述べた「教師の欠勤」の原因の一つであると言われている。衛生的でない、机・いすなどが十分にそろっていないなど勤労意欲がわきにくい環境であるからである。それは州や国からの資金不足が原因であり、教育に回すことのできる資金の少なさ、というものが大きな問題であることがよくわかった。

2 点目の地域格差については図 2.3 と図 2.4 を見てほしい。これらの表から、農村部より都市部の方が子供一人当たりの教育支出が大きく、通学率も高いことが見受けられる。これは収入格差が農村と都市で存在することや、農村では子供が労働に従事していることなどに起因すると考えられる。

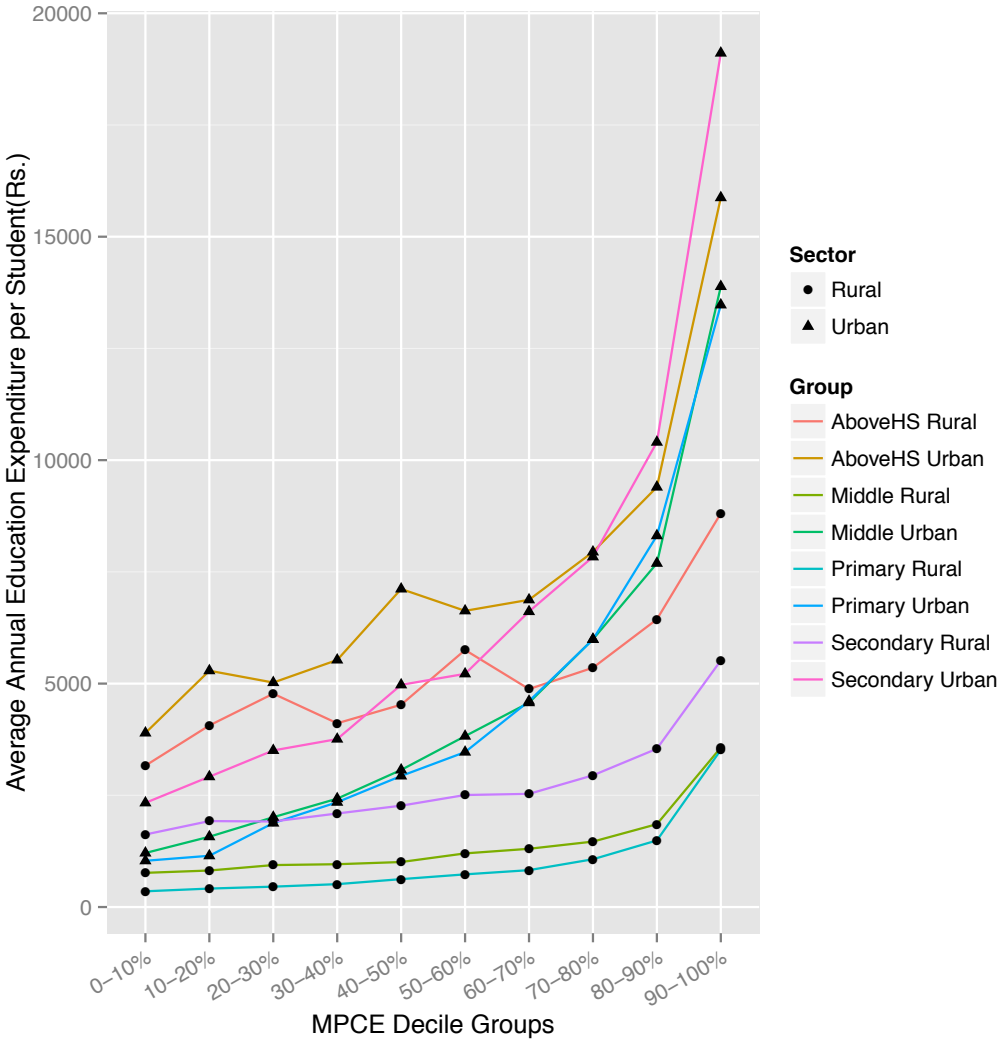


図 2.3　1 ヶ月あたり 1 人あたり消費支出 10 分位階級別の 5-29 歳生徒 1 人あたり教育支出

横軸は、1 ヶ月あたり一人あたり消費支出 (MPCE) の 10 分位階級。縦軸は、5-29 歳の生徒 1 人あたりの教育費支出 (単位はルピー)。Rural は農村、Urban は都市を示す。Primay は初等学校、Middle は上級初等学校、Seconday は中等学校、AboveHS は上級中学校以上を示す。
NSSO (2010) の Statement 4.19(61 頁) より作成.

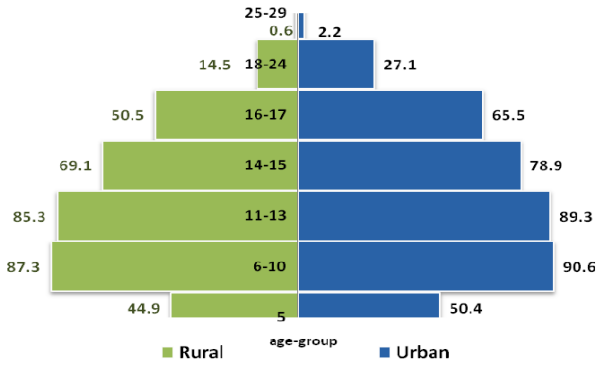


図 2.4　農村都市別年齢階級別初等学校以上通学率

横軸は、初等学校以上の学校に通学している生徒の割合を示す。縦軸は、年齢階級である。左側は農村 (Rural)、右側は都市 (Urban) である。
NSSO (2010) の Fig 4.1a(37 頁) を引用.

3 点目の男女差別については図 2.5 に着目してほしい。年齢が上がるにつれて男女の差が開いている。この理由としてはインドでは習慣的に女子の方が家事の手伝いをしていること、さらに早くから結婚し家庭に入ることが挙げられる。

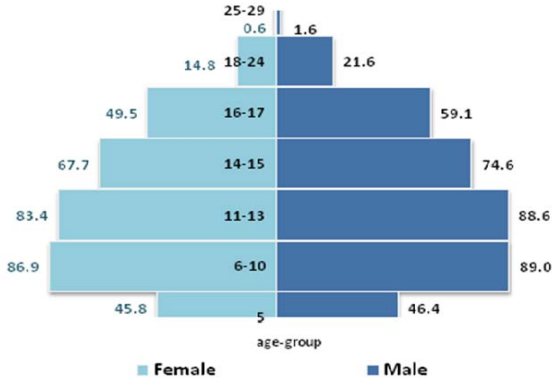


図 2.5　男女別年齢階級別初等学校以上通学率

横軸は、初等学校以上の学校に通学している生徒の割合を示す。縦軸は、年齢階級である。左側は女子 (Female)、右側は男子 (Male) である。
NSSO (2010) の Fig 4.1b(37 頁) を引用.

4 点目はインド社会全体の問題である。カースト差別について実際に目にすることはなかったが、新保先生の話ではデリー大学の教師でさえ「不可触民には授業をしたくない」という理由で授業の 2/3 が休講になるという。これらの問題はいまなお、とりわけ地方で根強いと言われており、教育だけでなくそれらの問題も考慮した対策が必要であろう。また不可触民の進学状況を表した図 2.6 に着目すると、そのほとんどの進学率は半分にも満たない。さらに年齢が上がるにつれて都市と農村部での進学状況の差が顕著に表れている。

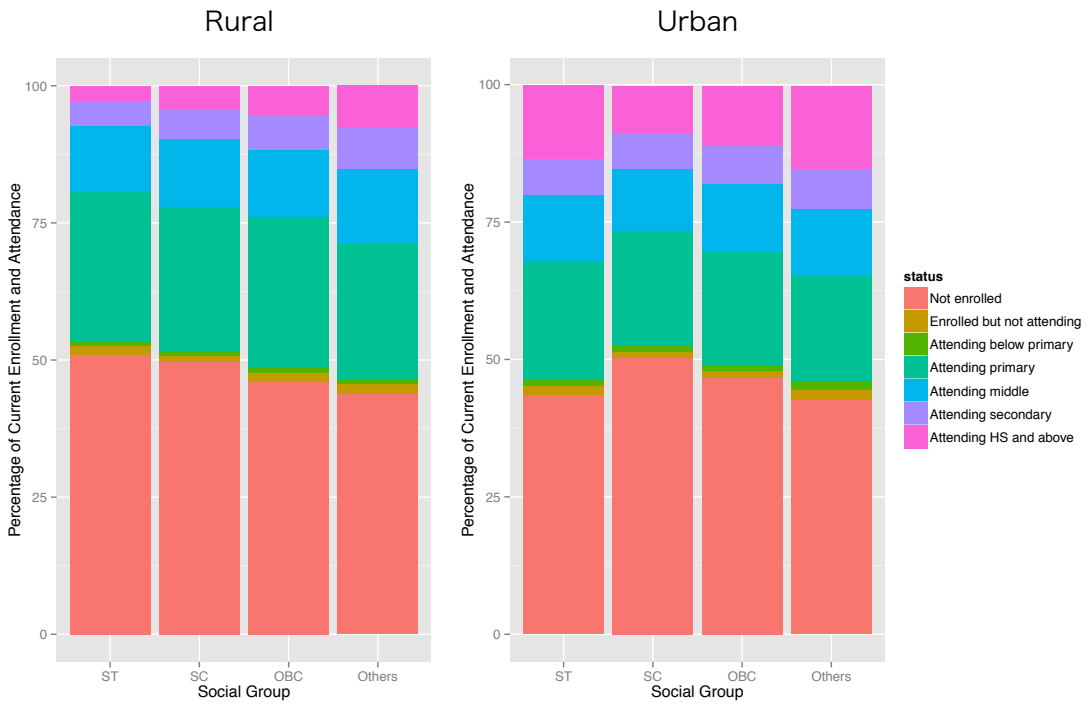


図 2.6　5-29 歳人口における社会グループ別就学率・通学率の分布

横軸は社会グループで、ST は指定部族、SC は指定カースト、OBC はその他の後進階級、Others はその他の社会グループを示す。縦軸は、非就学・就学の割合を示す。うち就学は、非通学と通学に分割され、さらに通学は学校のタイプに分割される。Not enrolled は非就学、Enrolled but not attending は就学だが非通学、Attending below primary は、初等学校以下に通学、Attending primary は初等学校に通学、Attending secondary は中等学校に通学、Attending HS and above は、上級中等学校以上に通学を示す。左側はは農村 (Rural)、右側は都市 (Urban) である。
NSSO (2010) の Statement 3.10(23 頁) より作成.

総じてみると、上記で示した 4 点を含め、やはりインド教育の実態の背景には国全体の**貧しさ**が大きく影響していることが分かった。そして貧困の改善には男女差別・カースト差別というインド社会の根幹に向き合わなければならない。インド教育の進展にはまだまだ時間が必要だと感じた。

第 3 章

持続的開発

3.1　はじめに

この章では、持続的開発について扱う。持続的開発とは、通常、「環境と開発は不可分の関係にあり、開発は環境や資源という土台のうえに成り立つものであって、社会の持続的な発展のためには、環境の保全を必要不可欠とする考え方」（環境省より）である。しかしここでは、社会の持続的開発において、環境だけでなく人間というリソースも大事にする必要がある、という考えによって記述されていることにも留意して頂きたい。

インドが目先の利益にとらわれることなく、国の貴重な財産であり、かつ国の力でもある国民をいかにしていくか。この章は、インドの将来を占うものであり、またインドがこれより世界の一角を成す先進国へと成長していくことへの期待を込めたものでもある。

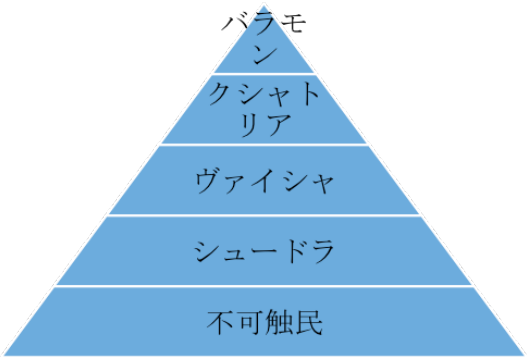
3.2　カースト差別

田中 智也

3.2.1　私的な感想ですが・・・

私の段落ではカースト差別という不平等について執筆していこうと思う。女性差別に関しては第 1 章において書かれているのでそちらをご覧いただけるとありがたい。

インドについて何か知っていることはないかという質問に対して、カースト制度というワードを答える人は多いと思うが、御多分に洩れず、私自身もそうであった。



右図はインドカースト制度の簡単な構図を表したものである。上位カーストとして、バラモン・クシャトリア・ヴァイシャがあり、下位カーストとしてシュードラがあり、更にその下に不可触民が存在する。インド憲法でこそ不可触民という区分は廃止され、そしてそれは指定カーストとして、その他後進階級 (ヴァイシャの一部ジャーティ) と指定部族と共に、国家政策によって優遇されている。

しかし、カーストという制度は、法律でこそ規制されているものの今も現代のインドにはびこり、低層の人々を苦しめている悪しき習慣である、と思っていた。優遇されているからこそ、差別が激しい社会とさえ思っていた。しかし、インドに赴いて、長年私の中で蓄積されていた印象が、ガラリと言うほどではないが、変わったといえよう。都市部を観光した際に、私は異国の雰囲気に圧倒されながらも、現地に住む人々を Study Tour の一員としての目線で観察した。もちろん私はインド人ではなく、ましてやインドにも住んだ経験はなく、そこに流れる微妙な空気は分かる訳もないのだが、異国人として、そこには差別など存在していなかった。これは単なる個人的な印象に過ぎず、低カーストの人々は都市部に出て来ることができず、もしくは都市部のすぐ近くにあるスラムにいるという事実があるというだけのことであったが、無学な私にとっては、驚くのに十分すぎる出来事であった。差別が目に見える形で存在していると少し期待していたのかもしれないし、そう思い込みたかったのかもしれない。

3.2.2 実際のところは

実際のインドでは、カースト差別による悲惨な事件が多発している。記憶に新しいのは、2012 年 12 月に起きた、インド人の若いカップルが無認可の乗り合いバスに乗車したところ暴行され女性が死亡した事件である。この事件によって世界中でインドのレイプ問題が大きく取り上げられることになったのだが、これは単なる女性差別だけの問題として片づけられるべきではなく、カースト差別によって起きた事件でもあるということにも注目して頂きたい。つまり、低カースト層の鬱憤のはけ口にされたのだ。また、2015 年 8 月には、カースト制度における「その他後進階級 (OBC)」に対する優遇措置の他層への拡大を要求して、死者まで出す暴動が発生した。低カースト層に対する差別だけではなく、上部カースト層への暴行、低カースト層の優遇措置に対しての反抗などと、問題は根深いだけでなく、複雑化している。

3.2.3 スラム

Study Tour の一環でスラム街を訪れた。こう書き出すと、今にもスラム街訪問の感想が始まりそうだが、それについては次の章を読んで頂くとして、ここでは、訪問を通じてのカースト的観点から進めていく。低カースト層の人々は元々農村部に多く存在し、国が発展するにつれ、出稼ぎのためにより稼げる都市部に出てくることとなる。しかし皆考えることは同じで、出稼ぎに来たのに関わらず仕事に就けない人々が増え、彼らはスラムを形成し都市に留まる。もちろん留まったところでお金を稼げるわけでもなく、生活環境はより悪くなり、負の連鎖に陥る。カースト的意識が弱まっているといえども、これは彼らが是とするところではないだろう。この連鎖を断ち切るためには、教育が必須であることは確かで、実際、カーストとは全く関係のない IT 産業において低カースト層の人々が活躍する場は十二分にあると言えるし、活躍している例もある。スラム街の近くにも、こぢんまりとした学校はあるにはあったが、十分な教育ができているとは思わない。だが、学校が存在していたことは事実であるし、新たなる発展への一歩を踏み出していることは間違いない。願わくは、その学校から世界を牽引する人材を輩出してほしいものである。

図 3.1　スラム・ウォークにて (1)

デリー・カント駅近くの線路沿いに広がるスラムにて。(撮影 水野 加奈子 (左)、柳本 祐介 (右)、2015 年 9 月 10 日)

3.2.4　総括

インドでの滞在日数が増えるにつれて、路上生活をする人々や町中を清掃する人々が低カースト層なのだと知ることになるのだが (路上生活者は発展途上国につきものだと思っていて、特に見向きもしていなかった)、先段落で述べた驚きは薄れることはないだろう。

しかしながら、カースト差別は当然ながら、多くの差別があるのもまた事実だ。もちろん、インド政府はカースト差別を撤廃する働きをしているのだが、残念ながら市民、更には警察の意識は改善されておらず、3.2.2 で述べたような事件は差別がいまだにインドにあることを浮き彫りにしている。今、インドは著しく経済が発展している国の一つであり、2022 年には人口が中国に並び、その後世界最大になるという。しかし、たとえ経済や人口という数字の部分で**先進国**になったとしても、国民の意識が改善され、文化レベルにおいて国民間の平等を達成しない限り、真の**先進国**にはなれないであろう。持続的発展への道とは、つまり、カースト差別の撤廃にあると言える。

3.3　安定した雇用について

石川 りさ

3.3.1　現状

インドに赴き、私はあまりの惨状に驚きを隠せなかった。講義や研究会を通じ、私たちはいくつかの開発経済学の主要理論を学んでいた。ルイス=モデルやハリス・トダロ=モデル、[*1] どのモデルにおいても「農村から都市への無制限労働供給」が課題とされていた。農村で偽装失業の状態にあった農民たちが必要最低限の賃金

[*1] ゼミでは黒岩他 (2015) の第 2 章「二重構造と労働移動」で勉強した。それぞれのオリジナル論文は Lewis (1954)、Harris and Todaro (1970) である。

で都市に大量に流れ込んだ結果、都市に失業者があふれかえるという事態だ。しかし、それがどういう状態か、私の想像は悪い意味で大きく裏切られた。デリーの中でも比較的清潔とみられるコンノート・プレイスの道端で物乞いをする人たち…高級ブランド店とのあまりの不釣り合わなさに思わず目を留めた私の横を一瞥もせず通りすぎていく人たちがとても印象的だった。また街中でも雇用の不安定さは垣間見えた。やけに勧誘してくるオートリキシャの運転手、道端で果物やジュースを売る商売人、観光地で小物や写真集を押し売りしてくる人たち…

理論で学んだことが、実際インド内でどう現れているか、私の小ではそうした「雇用の安定性」について論じていきたい。

3.3.2 所得分配の不平等について

Dréze and Sen (2013) 第 8 章「Grip of Inequality」の「Income Inequality and Economic Divisions」から、インドの所得分配についてまとめてみよう。従来の考えでは、所得の分配においてインドは他の発展途上国と比べ、さほど差がないとされていた。しかし、近年の研究により、この認識は誤りであり、さらにそもそもインドの比較の仕方自体にはバイアスが存在していたと指摘されたのである。これは、他国が一人当たり所得のジニ係数に基づき比較を行っているのに対し、インドは消費のジニ係数に基づき比較を行っていたことが原因である。これまでインドでは、確かな所得のデータが得られなかったため、他国と同じように比較することが叶わなかった。しかし、この新たな研究によりインドの所得の分配における認識は大きく覆る結果となった。

The India Human Development Survey(2004-2005) では、これまで一人当たり消費のジニ係数 0.35 を大きく上回った所得のジニ係数 0.54 というデータが観測された。これは、high-inequality countries として知られるブラジルや南アフリカと同レベルの水準だ。もちろん、サンプルが少ないため一時的な判断となってしまうが、インドの不平等さが多くの発展途上国と同レベルであるという従来の見解は懐疑的である。

こうした結論を裏付けるデータとしては、一人当たりの支出・所得・資本のデータが挙げられる。どのデータにおいても、裕福な人々に富が集中しており、その不平等さは明白だ。もちろん、こうした不均等な分配がなくなれば経済成長の恩恵は貧富に関わらずインド全体に広がる。経済が生んだ分配の不平等により、社会的な面では栄養・保健的な問題を生み、政治的な面では腐敗や権力の不均等を生むなど二次・三次の不平等を生むのだ。

では、こうした問題の本質は何であろうか。それは、インドにおけるカースト制度の撤廃やジェンダー間での不平等が是正されてきたといいつつも、未だその影響が残存し続けていることである。これまで述べてきた不平等が解決され、social justice を目指すための第一歩として、衣食住、衛生、ヘルスケア、子供の教育費といって人間の尊厳的な生活に必要とされる基本的なものを国民全員に保証する政策が急がれる。

3.3.3 労働環境 — オートリキシャについて

インドの主な交通手段として知られるオートリキシャやサイクルリキシャ。日本で言えばタクシーのような存在だが、その実態は大きく異なる。観光名所の近くには必ず大勢のリキシャが待機し、観光客を見れば寄ってたかって声をかけ、客の取り合い・ぼったくりの横行が日常的だ。観光客の中には推しに負け高額を支払ってしまう者もいる中、彼らの収入源は必ずしも安定しているとは言えない。ルイス=モデル、ハリス・トダロ=モデルを通して都市型の貧困を学んだが、デリーのリキシャの労働について興味深い論文があったので紹介したい。

労働移動とネットワーク、都市貧困—デリーのリキシャ引きの事例から—

一橋大学黒崎卓教授の研究論文である (黒崎 (2013))。対象年月・地域は、2005 年 8 月デリー北東部のヤムナ川東岸　North East District であり、調査方法はリキシャ・セクターのパイロット調査を用いている。黒崎は、80 名のリキシャ引き–rickshaw pullers– (出身農村からの一時出稼ぎであると主張する者 35 名・デリーの居住者であると主張する者 45 名) とリキシャ親方–owner-contractors–26 名を調査の対象とした。その結果として、まずカーストについては指定カースト (SC) が全体の 43%、その他後進諸階級 (OBC) が 41% を閉め、高位カーストのリキシャ引きは観測されなかったという。教育水準も低く、識字率は 49%、年齢で見ると出稼ぎリキシャ引きの平均年齢が 25.7 歳、居住者リキシャ引きの平均年齢が 28.8 歳であるという。また、こうしたリキシャ引きの大半が農業労働者及び零細農家の出身者や失業者であり、定住型リキシャ引きの中でも住居に居住している者は全体の 13% にすぎないのだという。

彼らはリキシャを最低 15 ルピー/日、最大で 30 ルピー/日の固定料金で賃貸借契約を結び、毎日 10 時間ほどの経営で 95 から 110 ルピーほどの所得を得ており、月の平均労働日数は 12.4 日だという。対してリキシャ親方は平均 28.5 台のリキシャを所有しており、16.4 台のリキシャを稼働させている。その 1 台あたりの収入は 304.9 ルピー/月にものぼるという。年利で換算すると、28 58% にわたり、抵当有のインフォーマル金融での借入利子率 (15-60%) や、抵当なしのインフォーマル金融利子率 (48-120%) と大差ない。

ここから私は、リキシャ引きの給与の低さに嘆いたが、黒崎は別の見解を述べている。彼は、教育を全く受けていない層や農村地域での生計工場に乗り切れない貧困層にとって、リキシャ引きの仕事は所得水準の上昇、階層上昇のきっかけをつかむ機会になっているという。それは、都市のリキシャ親方との紐帯を築くなどインフォーマルなネットワークを構築することによって、より割のいい仕事を手に入れることができ、また都市のリキシャ引きと差異のない収入を得ることができるからである。これは、最初に述べたルイスやハリス=トダロのモデルから見る都市型の貧困とはかなり様子が異なる。先のモデルでは、農村での人口上昇から偽装労働者となってしまった出稼ぎ労働者が都市に流出し、雇用先を見つけることができず、都市の失業者となってしまうスパイラルを述べていた。だが、少なくともリキシャ引きの事例の中では、出稼ぎ労働者とされる人々には階層・収入上昇の希望が見出せるのである。

3.4　持続可能な食料体制 (モンスーンの不調などに弱い現在のインドの農業状態などの見直し)

志儀 裕輔

3.4.1　現状

インドに行く前、私たちが想像していたのは、スラムなどで暮らす人々だけが食料不足に陥っているという現状だ。日本などの先進国においては食べ物へのアクセスがさほど難しくなく、また、発展途上国の現状を実際に目で見て肌で感じ取ったことがなかったからである。しかし、実際にインドに行ってみるとスラムはもちろん、普通の都市、ましてやデリーにおいてさえも食料不足に陥っている人が多くいた。町を歩くといたるところに地面に寝そべっている人や、物乞いをする人が見受けられた。食料へのアクセスが難しいためかガリガリに痩せた子供たちが多くいた。彼らが私たちのほうに寄ってきて、物乞いをしてきたとき私はどのように反

応していいか分からなかった。なぜなら、日本で物乞いをする人は少なく、実際に私が物乞いをされたことがなかったからだ。物乞いをされたとき、私は何もすることができず、ただ無視をし続けていた。その時、私は自分の物乞いに対する無知を知った。彼らにとっては、私たちが当たり前のようにやっている食べ物を得るという手段が、物乞いしかないことを知った。日本とインドは全然違う、そう書物などでいくら勉強をしていてもやはり実際にインドに行き、現状を見てからでしか学べないことがたくさんあった。また、彼らのように食へのアクセスが難しくないが、貧困線あたりの人々が何とか暮らしっている状態のところに、災害によって食料価格の上昇が起これば、彼らは実際に私たちがインドで見た地面に寝そべる人々や物乞いをする人々のようになることは容易に想像できる。

3.4.2　インドの災害とそれに対する実対策

インドには大きく分けて雨季と乾季がある。雨季には洪水、乾季には洪水といった災害がある。私たちがインドを訪れたときは雨季が終わり乾季の始めであった。そのため、インド滞在中に雨が降ることはなかった。このようにほとんど雨の降らない乾季において、干ばつという災害が起こる可能性がある。私たちが SCRIA という NGO 団体を訪れた時、施設内に貯水設備を目にした。SCRIA の方によると乾季にはほとんど雨が降らないため雨季の間に降った雨水を貯めておく必要があるそうだ。こうすることで乾季の時に水不足に陥らないように対策を講じていた。

図 3.2　SCRIA における雨水の貯蔵

(撮影 水野 加奈子、2015 年 9 月 7 日)

3.4.3　具体的な対策と将来の展望

で述べたような現状が当たり前のようにあるインドにおいてしっかりとした食料体制を作ることは非常に大切だ。まずは、今現在食料不足に陥っている人々が安定して食料を得られるような食料生産体制も築き上げる必要があると感じた。具体的には、インドの食料生産の効率性を上げる必要がある。上でも述べたようにインドでは災害が起きていない状態でさえも食料不足に陥っている人が多くいる。彼らの食料不足を解消するためにも食料生産の効率を上げ、絶対的な食料生産量を増やす必要があると考える。さらにその生産物を保存しておく備蓄設備も必要であると感じた。日本のような先進国では各家庭や各施設において独自の備蓄施設を持っている。それに対して、私たちがインドを訪れた際、食料の備蓄施設を見ることはなかった。食料の備蓄施設を建設、整備することで災害が起きた時に備えることができ、ある程度食料不足に対処できるようになる。

また、災害が起きた時にも安定した食料供給ができる食料体制を作ることが必要である。具体的には、私たちが SCRIA で見たような貯水設備を作ることが大切であると感じた。雨水は生活用水だけでなく農業用水としても非常に大切である。貯水設備は雨季の時に洪水対策として利用でき、また乾季の時には雨季の時に貯めておいた水を利用することで農地が干ばつするのを防ぐことができる。このような対策をすることでインドに安定した食料基盤ができ、大きな発展を遂げられると感じている。

3.5　水の持続的開発

佐藤 新

3.5.1　インドの水資源、現状

インドは世界で最も水に問題のある国の一つと言われている。以下の図を見てほしい。この図は川や湖、浅い地下水の表層水を求めた企業、農場、人々の間での競争の度合いを示している。濃い赤色の地域では極限まで高いストレスがかかっており、一年で利用できる表層水のうち 80% が毎年使われているということを意味している。赤い色の地域では一年で利用できる表層水のうち 40% が毎年使われているということを示している。およそ 54% のインド人が High(40~80%) もしくは Extremely High(>80%) なストレスの中にいるということである。

つまり推計およそ 6 億人が高いリスクの表層水供給の混乱の中にあるということだ。

特に、北インドにおいて非常に高いストレスがかかっている点に注目してもらいたい。北インドは穀物農業地帯であり、パンジャーブ州とハリヤナ州だけで中央政府の米供給の 50% を生産しており、小麦に関しては 80% も生産している。北インドにおいて特にストレスが高いのはこのような地域だということが関係しているのかもしれない。米も小麦も水を多く必要とする食物である。

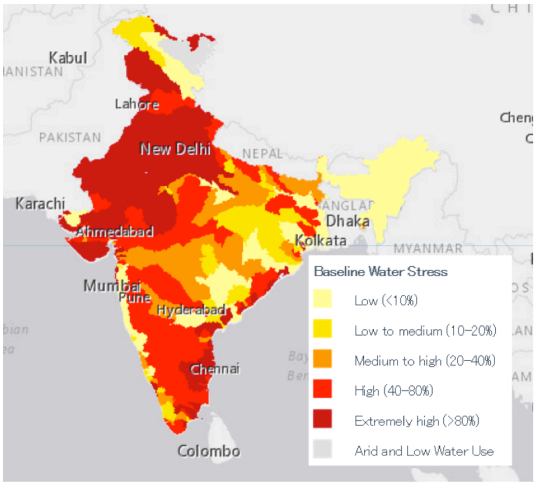


図 3.3　水ストレス

引用: WORLD RESOURCES INSTITUTE (2016 年 2 月 23 日現在のリンク)

ハリヤナ州は我々が India Study Tour で訪れた地域でもあり、限りなく広がるミレット畑がとても印象的であった。

図 3.4　ミレット畑

2015 年 9 月 ハリヤーナ州リワーリー県コーリー村にて (撮影 佐藤 新、2015 年 9 月 7 日)

インドでは生活用水においても農業用水においても水の供給がひどく安定的でなく、マハラーシュトラ州、カルナータカ州、アンドラプラデシュ州、オリッサ州、クジャラート州、ラージャスターン州などは旱魃が頻発している。インドの農業は農業用水をモンスーンに依存しているため、モンスーンの不調は旱魃に繋がり、農業生産に大きな影響を与えてしまう。モンスーンの不調など不定期に訪れる自然起因の問題はどうしようもない。問題は自然起因の問題に対応できる設備、体制が整っていないことである。旧式の灌漑設備や農業インフラの未整備、貯水意識の欠如が今の農業用水の問題としては一例としてあげられる。

農業用水のみならず生活用水においても衛生的で安定した水の供給システムを作ることは早急の課題である。ユニセフと WHO の報告によると、2010 年時点での上下水道の水供給へのアクセス率は 92% であり、衛生施設へのアクセス率は 34% である。水供給に関して言えば 2010 年時点でミレニアム開発目標を達成している。しかし一方で衛生施設へのアクセス率は低く、特に農村部での普及が遅れているようだ。供給における普及率はあがっている反面衛生的な水にはまだ程遠い。インドの生水は勿論、ホテルの蛇口から出てくる様な水までリスク (A 型肝炎や赤痢など) が付きものである。

我々も現地に居る間、飲み水には気を払った。飲み水はペットボトルに入ったミネラルウォーターが鉄則である。レストランなどでの食事の際にコップに入れて渡される水は勿論、水道水が入っているであろうもの (屋台のラッシーやミックスジュース) は極力避けた。中には洗顔や歯磨きの際にもミネラルウォーターを使う者もいた。ミックスジュースに至っては現地の人も怖くて手を出さない程だそうだ。

結果、これほどにも気を払っていたのにも関わらず腹を下す者や、熱を出す者がいた。我々日本人の綺麗な水道水に甘やかされた胃袋は如何に微量であろうともインドの水道水に触れるとこの様である。インドの飲み水がどれほど危ないか身を以て知った体験であった。余談であるが、インドではペットボトルに入った水道水がミネラルウォーターに混じって販売されていることもあるので (販売者が中身を入れ替えている) 十分注意しなければならない。

国連の予測だと、インドの人口は 2022 年までに中国を抜き、14 億に達するとされている。生活用水の安定的且つ安全な供給は早急に取り組まなければならない大きな課題と言えよう。

3.5.2　SCRIA の活動

SCRIA は Social Center for Rural Initiative & Advancement の略であり、地方のイニシアティブと進歩のために南ハリヤナと北ラージャスターンを中心に社会的な活動をしている NGO 団体である。

我々は SCRIA を訪れ、主に女性の地位向上活動について学び、ディスカッションをした (このことについての報告は別章を参照のこと)。しかしその活動は数ある活動の中の一部であり、施設の中で自家発電システムや雨水の貯水槽などを見せてもらい、再生可能エネルギーや水の安全保障を求める活動もしていることがわかった。

この地域では飲料水と灌漑目的の水の慢性的な不足に直面している。伝統的にこの乾燥地域の村人は水の需要を満たすために地区内の井戸や村の池に依存していた。しかし、夏場になるとこの井戸や池は干上がってしまうため、村の女性が 4、5km 歩いて水を取りに行かなければならなかったそうだ。歩かずとも水をタンカーから買う方法があるのだが、そのコストは月額 400~500 ルピー、日本円にして約 800~1000 円であり、到底すべての人にとって余裕を持って支払うことができないような額である。政府による水の供給や灌漑用水への依存の増加は伝統的な水の保全システムや収穫構造の地域管理を侵食し、その結果、伝統的な水の保全構造は崩壊し、荒廃に陥ってしまうのである。

図 3.5　コモンズとしての貯水池

2015 年 9 月 ハリヤーナ州リワーリー県コーリー村にて (撮影 佐藤 新、2015 年 9 月 9 日)

水はこの地域で最も重大な問題の一つであり、SCRIA は水の発展と保護について管轄地域内で大変貢献しているようだ。例えば、差し迫った飲料水の需要を満たすために性能の良い手動ポンプの設置をしている。他にも、SCRIA は伝統的な池や沈殿物で埋まっている村の井戸の再生、屋根水の貯水の促進、川の分岐点の開発を通して持続可能な節水と再生活動に貢献している。

左の写真はハリヤナ州の農村にて撮影した溜池である。乾燥しているこの地域では池に雨水などを貯めているようだ。このような池は左にあるものだけでなく、同じ地方の他の場所でも見受けられた。

気候や地理的な問題により水が不足してしまっている、ということは到底人間にはどうしようもできないことである。しかし、水が不足してしまっているからどうしようもないと泣き寝入りするしかない、というわけにはいかない。南ハリヤナ州では限られた灌漑施設での天水を用いた自給自足農業が農村経済の柱になっている。伝統的な構造を守りつつ、あるものを最大限活用しくことで水の需要を少しでも満たせるようになるのではないだろうか。

3.5.3　水の持続的開発の展望

前節でも述べたとおり、地域の NGO が地域の水の持続的開発を進めている例もあるが、インド全体で見ると水の持続的開発はまだまだ序章にすぎない。SDGs [*2] では 2030 年までに、すべての人の安全な飲み水と衛生施設への普遍的なアクセスを確保することを目標としているが、現場では開発が遅々として進んでいない。

例えばアグラはインドでも最悪の水環境と言われており、130 万のアグラ市民が世界で最も劣悪な質の水の下で暮らしている。このアグラでは現在「アグラ上水道整備事業」が始動している。ガンジス川の水をアグラまで引いてくることで、市民に安全で安定的な水を供給しようという計画だ。しかし計画されてから数年が経過している今でも浄水場の整備や土木工事は未着工のままである。そもそもガンジス川から水を引いてくる以前に水道網から水道行政に至るまで崩壊してしまっているからである。

アグラでの例の様な状況を打破して目標を達成するためには、まずはインフラの整備を進め、衛生施設を提供するとともに、衛生状態の改善を促すことがマストである。そして、水不足を緩和するためには、森林、湿原、河川など、水関連の生態系の保護と再生が欠かせない。水の効率的利用を促進し、水処理技術を向上させるにはより一層の国際協力が必要となっているのである。

3.6　まとめ

本橋 加奈子

私たちが India Study Tour で目にしてきた光景は先進国で暮らす私たちからすれば衝撃的で想像を絶するものばかりだった。インドの首都であるニューデリーにも少し路地に入るとスラム街があり、そこでは子供から老人まで多くの人々が生活していた。そして彼らが暮らす家の屋根は木を結び合わせそこに布などを覆い被せてできたテントのようなもので災害が起きたらすぐに壊れてしまいそうな感じであった。インドのスラム人口は約 1 億人であり、年々増え続けているのが現状である。

[*2] 持続可能な開発目標 (SDGs, Sustainable Development Goals)。2015 年までの開発目標であったミレニアム開発目標 (MDGs, Millennium Development Goals) を継承する 2015-2030 年の持続的開発目標、人類、地球、繁栄のための 17 目標と 169 ターゲットからなる。2015 年 9 月 25 日に国連総会で 193 カ国の合意で採択された。(国連開発計画 (UNDP) 東京事務所の持続的開発目標に関する Web ページへのリンク)

図 3.6　スラム・ウォークにて (2)

デリー・カント駅近くの線路沿いに広がるスラムにて。(撮影 本橋 加奈子、2015 年 9 月 10 日)

こうしたインドにおける貧富の差という大きな問題を解決するためにも今まで述べてきた

- ヒンドゥー社会に深く根付いてしまっているカースト制度という差別を完全に人々の意識から取り除くこと
- スラムに住む子供たちも教育をしっかりと受け、人々に平等に安定した雇用を提供すること
- 食料不足を解消するために、食料生産の効率性を上げて食料生産量を増やし、また災害などの危機に備えて生産物を保存しておく備蓄施設を創設すること
- 上下水道を整備し全ての人々が安全な飲み水にアクセスできるようにする

といった持続的開発が必要であると考えられる。また持続可能な開発を進めることは世界共通の課題として認識されており、私たちが実際にインドで目にしてきた現状や問題は国連が掲げる持続可能な開発目標 (SDGs) に直結するものであると結論付けたい。

参考文献

Dréze, Jean and Amartya Sen (2013) *An Uncertain Glory, India and Its Contradictions*: Penguin Books.

Government of India (2014) “Saansad Adarsh Gram Yojana (SAGY) Guidelines,” October, Department of Rural Development, Ministry of Rural Development, Government of India.

Harris, John R. and Michael P. Todaro (1970) “Migration, Unemployment and Development: A Two-Sector Analysis,” *The American Economic Review*, Vol. 60, No. 1, pp. pp. 126-142.

Kremer, Michael, Nazmul Chaudhury, F. Halsey Rogers, Karthik Muralidharan, and Jeffrey Hammer (2005) “Teacher Absence in India: A Snapshot.,” *Journal of the European Economic Association*, Vol. 3, No. 2-3, pp. 658 - 667.

Lewis, W. Arthur (1954) “Economic Development with Unlimited Supplies of Labour,” *The Manchester School*, Vol. 22, No. 2, pp. 139–191.

NSSO (2010) “Education in India: 2007-08 Participation and Expenditure,” Nss Report No. 532, The 64th Round of National Sample Survey, National Sample Survey Office, Ministry of Statistics and Programme Implementation, Government of India.

黒岩郁夫・高橋和志・山形辰史（編） (2015) 『テキストブック開発経済学』，有斐閣ブックス，第 3 版.

黒崎卓 (2013) 「インド・デリー市におけるサイクルリキシャ業: 都市インフォーマルセクターと農村からの労働移動」，『経済研究』，第 64 巻，第 1 号，62-75 頁.

感想

SCRIA 最高責任者のラルさんと一緒に (SCRIA コーリー・センターにて)

スラムウォーク

鼻を思わず覆うような臭い、どこと構わず闊歩するやせ細った動物たち、ごみの山に点在する住居 ・・・およそ人が住めるとは考えられない中で暮らす大勢の人達が私たちを迎えてくれた。その中には、数時間前まで一緒に絵を描いてはしゃいでいた子達も見受けられた。しかし、私はあまりの惨状への恐怖から、単なる物珍しさでスキンシップをはかってきた子供たちに対し粗雑な対応しかできなかった。親しみを感じてくれた人たちに対する自分の中で拭い去れなかった先入観と未熟さを感じると共に、どこに行っても変わらない子供達の純粋さを感じさせられたツアーだった。

(石川 りさ)

インドの発展は耳にしていたが、確かに道は激しく往来する自動車で埋め尽くされ、商売は盛んに行われ、町は活気にあふれていた。しかし、スラムは対照的に暗くて、臭くて、汚かった。自分と同じ人間がゴミや家

畜とともに暮らしている様は衝撃的だった。偶然インドのスラムで生まれた彼らの人生を、自分と比較してしまうと、彼らの人生を他人事と放っておくことはできないと感じた。彼らへの研究は学生として微力ながらできる貢献に繋がると信じている。

(上野 卓哉)

最初に行った場所が、家のすぐそばに線路があるところでいきなり衝撃を受けた。テレビでしか見たことがない場所を生でみれるのは貴重な経験だった。日本の整備された道路に慣れた僕にとって、スラムの汚くて獣のにおいがする道は正直歩くのも苦痛だった。

(小野 州)

このツアーの中で一番印象深かった経験といえる。線路沿いのスラムでは今も使用されている線路の間で洗濯物が干されており、日本ではありえない立地で暮らしている彼らのしたたかさには驚かされた。また、スクラップ工場のそばにあるスラムはまさに想像していたスラムそのものであり、狭くごみの散乱した路上で洗濯をする人、体を洗う人、通りに生息する動物とまさに何でもありの空間だった。貧しい人たちが暮らすそのような空間を実際に目にできるのはなかなかない経験だという点でとても有意義だったと思う。

(海住 武司)

インドに行くにあたって最も期待していたプログラムがスラムウォークだった。インドの貧困に最も身を以て近づける機会だと思っていたからだ。スラム街は、高い賃金を期待して都市に出てきた結果就業先を得ることができなかった人々により都市近郊に形成されるものだと勉強した通り、大通りや商店街の側にふと存在していた。まさしくスラム街はインドの経済発展の裏舞台であり、雇用なき成長の産物であった。五感で感じるカオスがそこにはあり、我々はそこに踏み入れたものしか分からない貧困の現実を知ることができた。

(佐藤 新)

スラムウォークをするまでは正直、スラムをなめていた。しかし、実際にスラムを歩いてみて日本では見たことがない景色が広がっていた。まともな住環境が整っていなかっただけでなく、豚やヤギ、犬などと一緒に暮らしていたことには驚いた。その現状を自分の目で見ることができたことに Study Tour に行った意味が大いにあると思う。

(志儀 裕輔)

スラムは踏み入るにつれどんどん雰囲気が変わっていき、警戒心を覚えた。そこら中のゴミ山を豚やヤギが漁り、獣臭や腐臭が漂いハエも飛び交っている。おもわず口に手を当ててしまう状況だが、そこにちゃんと人は住んでいた。路上で料理を作っていたり、子どもがはしゃいでたりと少なくとも私達が見た時は皆活気に溢れていた。特に子供たちは元気そのもので目が輝きに満ちており、人の力強さを感じた。

(須賀 健太)

一番に思ったことは「こんなところで人間が生活できるのか」ということだった。ゴミやなにかが散乱し、豚やヤギなどの動物が歩き回る・・・。こんな不衛生な環境で暮らしていて病気にならないのだろうか。スラ

ムにはたくさんの子供がいたが、彼らの健康に悪い影響を与えているのではないか。現実の光景を目の当たりにしても、常にここで生活している人たちがいるとは信じられなかった。

(鈴木 浩太)

未知の体験だとでも言うかのように、視覚嗅覚聴覚全てが悲鳴を上げた。そこでは、豚の群れがゴミを漁り、道の中央を汚水が走り、我々日本人を物珍し気に付いてくる汚らしい服を着た子供達がワーワーと騒いでいる。どれも日本では見られない光景だ。僕個人としては、そんな光景に気分をとても害してしまい、子供達と戯れることはせず、後方からこの凄惨な状況を漠然とだが暗澹とした気持ちで眺めていた。このスラムのような場所に住む人々を直接救ってやろうという大きな野望も気概も残念ながら僕の中で形成されることはなかったが、社会に出て彼らと間接的にでも関わる機会があった時には精一杯頑張ろうという小さな夢がモワモワと出来上がったのは確かである。

(田中 智也)

スラムの路地に入ると、黒ずんだ豚や痩せこけたヤギが闊歩しそれまでデリーで嗅いだことのなかった異臭が漂う。子供たちは一様に細く、靴も履いていない姿が散見されるが、そこには貧困の暗さはない。大人たちからは観察されているような目線にドキドキしながらも、私たちにずっとついて来てふざけあう子供たちの無邪気な笑顔が印象的だった。

(中村 まゆら)

私達は今回、2 つのスラムを見せていただいた。1 つ目は、鉄道の線路からわずか 1m ほどの位置に線路に沿って続くスラムであった。家はまさにスラムといえる家族の人数に合わない小さな住まいが密集していた。そのスラムの中に住み駄菓子屋さんを営む人にお話を聞いたところ、1 日 1 日生きていくだけの収入しか得られず、その日暮らしの生活であるということだった。生活水準向上のための貯蓄をする余裕などあきらかにないようだ。しかし、そのスラムに住む子供はしっかりと学校には通えているようで、下校時間になると制服を着た子供たちが元気に帰ってきた。線路の近くのスラムの小さな住まいに住んでいながら、元気で笑顔な子供たちが印象的だった。2 つ目に訪れたスラムは、工場の近くにあるスラムであり工場で働く子供たちもいるとのことだった。生活レベルは 1 つ目のスラムに比べてとても低く、人々の服や身体はとても汚れていて、人々の表情も怖く早くて、ここから抜け出したいという思いさえもした。廃棄物の臭いや砂ほこりがひどく、豚やヤギなどの家畜がそこらじゅうにいて、とても不衛生で空気が悪かった。2 つ目のスラムに行く前に訪問した、オープンスクールで交流した子供たちがここに住んでいると思うと心がとても苦しくなった。ここでも、子供たちはとてもエネルギッシュで男子のゼミ員と仲良く交流していたのが印象に残っている。このスラムに生まれた子供たちは、大人になってもこのスラムの大人のようにこのままここで暮らしていくのかと思うと、この負のループからどうにか抜けられるように国や世界全体でアクションを起こしていくべきだと感じた。

(火口内 愛)

スラムは、一言でいえば衝撃的でした。明らかにほかの場所とは違う雰囲気、漂う異臭、ぼろぼろの衣服を着た人々、野生の犬や豚、瓦礫やごみをあさる子供たち。そのどれもが日本に住む僕らには未体験のものであり、これからも体験することのないものだと感じました。そんな異質な雰囲気の中にも唯一、子供たちの笑顔だけは日本と変わらず、安心できたのを覚えています。

(前田 竜)

スラムの学校では、そこに通う子とそれまで見てきた普通の学校の子と生活的な大きな差は見えなかった。しかし、その後スラム街を歩いた時に、その子達の生活が動物と場所で暮らすようなどれだけ厳しい現状にあるかというのを実感した。スラムウォーク前に、あそこで私たちが「見たいと」言わなかったら、その子達の暮らす背景を知らないままだったと思うと、自分の無知の恥ずかしさを感じた。そしてもちろん、自分たちが見たものはほんの一部でしかなく、インド全体には私たちが知らない貧困が沢山あるということを自覚して、よし深く学び、問題意識を高める必要があるということを忘れずに今後の研究を進めたい。最後に、案内をしてくれた方々に感謝したい。

(水野 加奈子)

スラム街に入った瞬間に今までの町並みとは雰囲気がガラッと変わった気がしました。道端には瓦礫の山があり建物も廃墟のようで警戒心と恐怖心がうまれました。ブタ、ヤギ、ニワトリがそこら中を自由に歩きまわっていました。道は舗装されておらず水たまりやゴミだらけなのにビーサン、裸足で歩いている人ばかりだったのも衝撃的でした。家は木材を立ててそこに布を覆い被せただけのような簡易的なものも多く見られ、中は薄暗く電気がついていない状態でした。また、スラム街にはたくさんの子どもたちが住んでいて、わたしたちが歩くとずっとついてきてとても人懐っこく無邪気に笑っていたのも印象的でした。

(本橋 加奈子)

DISHA のショブハナ・ラドハクリシュナさん (新保の右)、ラヴィ・チョプラさん (新保の右の右) らと一緒に。

学校での交流

「うまく伝えられるかな・・・」と緊張で顔がひきつっていた私たちを迎えてくれたのは、無邪気な子供達だった。不器用ながらも折り紙で作った箱や髪飛行機を「見て! 見て! うまくできた?」と次々に見せてきてくれる姿はとてもかわいらしく、それまでの緊張なんてどこかに行ってしまう程。何に対してもまっすぐで、雑巾掛けまで必死に取り組んでいた子供たちの純粋さがまた愛らしく思わず笑みがこぼれた。締めくくりに飴を食べて「おいしいね」って笑い合ったあの暖かい時間は、忘れられない。

(石川 りさ)

私のクラスでは、子どもたちに折り紙の折りや箸の使い方を教えた。しかし、子どもたちや教師と歌を歌いあったことは印象的だった。子どもたちの歌はゆったりとしたテンポで、意味はよくわからなかったが、親しみを感じた。教師によると歓迎を意味する曲らしい。我々は、新保先生のご提案でひな祭りや若き血を歌った。当然彼らも意味はわからなかったと思うが、がんばって一緒に歌ってくれた。言葉は完全に通じなかったが歌うことで一つになれたと思った。

(上野 卓哉)

小学生に箸の使い方を教えるという授業が非常に楽しかった。英語がわからない子達に、はじめて見たであろう箸の使い方を教えるのは苦労したが、うまく使うことができて無邪気に喜ぶ小学生はとてもかわいかった。高校生に日本が経済成長できた理由をきかれたときは、鋭い質問をしてくるなあと感心した。

(小野 州)

現地の学校では日本人というだけでぞろぞろと子供たちが寄ってくる、まさに有名人になった気分だった。現地の学校では日本について尋ねられることも多く、日本に好意的な子供もたくさんおり、とても楽しい時間だった。その一方で彼らの疑問に答えていく中で、日本にいるときは特別意識しないようなことを尋ねられ、回答に苦しんだこともあった。外国を理解するというのは大切だが、まずは自国について理解を深めることが国際交流には必要であると感じた。

(海住 武司)

小学校の子供達は日本人の子供より幾分もエネルギッシュで人懐こかった。しかし、一番驚いたのは先生のいうことをしっかり聞く姿勢である。教室が騒がしくなると、先生が一喝、瞬時に教室は静まり返る。師を敬うその姿勢は日本人の子供も見習わなければならないのではないだろうか。中高生くらいの子供達との討論はレベルが高く、とても刺激的だった。「日本は敗戦国なのに何故植民地化することなく経済成長することができたのか」という質問に我々は即座に答えることができず狼狽し、恥ずかしさを感じたのを覚えている。インドの子供の高い学力とこれからのインドを支えていきたいという強い思いをこの場にて感じた。

(佐藤 新)

インドの小学校では日本文化である折り紙について教えた。小学生はまだ英語が通じず、教えるのになかなか苦労した。一方で、高校を訪れたときは皆英語が通じ逆に私たちが圧倒されるほどであった。日本の学生と大きく違うところは、英語を使って議論ができ、しかも内容はかなり高度であった。私たちも彼らのようにグローバルな視点を持ち、英語を通じて自分で議論できるようにならなければならないと感じた。

(志儀 裕輔)

小学校では箸の使い方や折り紙を教える予定だったが、最初はどれくらい興味を惹けるものか不安だった。しかし実際に教えてみると皆食いついてくれ、グイグイ質問しに来たりと驚きの知識欲であり感心した。帰り際に教室を雑巾がけすると、そういう文化はないらしくひかれてしまった。また年齢がバラバラのスラムの子ども達のための学校でも絵を描いたりする交流を行った。そこにくる子は綺麗なおめかしをした子が多く、子どもにとっての学校の重要性を感じた。

(須賀 健太)

デリー市内の公立学校にて、小学校低学年くらいの少女たちに折り紙や箸の使い方を紹介した。簡単な英語しか通じなかったけど (私の英語に問題があったのかもしれないが・・・) できたときには満面の笑みで報告してくれてこちらまで嬉しくなった。箸の使い方でズルをしたり、写真をせがんできたり、少しませたところも日本の子供たちとは変わらないのだと感じた。

(鈴木 浩太)

女子小学生に日本の文化を教えるというプログラムにおいて、折り紙と日本式掃除を披露した。やはりというか複雑な折り方に彼女達も苦戦したようで質問が殺到し人気者になったようなこそばゆい思いをした。驚いたのは、雑巾がけという掃除の仕方を体験したい人を募った際に多くが手を挙げたことだった。相当珍しかったのだろう。このプログラムを通じて、緊張していた自分がいつの間にか笑顔になっていて、ソフトパワーの偉大さを身に染みて実感し、国際協力における重要さを理解した次第である。

(田中 智也)

Government school に private school、小学校から高校生までいろんなタイプの生徒との交流を通して、ここ 10 年ほどで学校施設が充実し、より多くの子供たちが教育を受けられるようになったことが分かった。しかしそのように環境が改善されているのとは対照的に、どの学校でも同様に男女でクラスや校舎が区別されているのが逆に印象的であった。

(中村 まゆら)

インドの学問面については、元から数学に強いイメージがあった。ハリヤナ州の小学校では、イメージ通りとても小さな字で書かれた分厚い教科書を見せていただき、教育レベルの高さを感じた。しかし、その学校の先生や関係者のお話では、インドでは、学校があり子供が学校に通える環境があっても、先生自体が学校に来ないことがあるそうだ。ハリヤナ州では教師の出勤を監視するシステムができ状況は改善されているらしいが、他の地域ではまだまだ問題があるだろう。我々先進国の人々は学校がないから、または家の人が学校に行かせてくれないから途上国の就学率は低いのだと思い込みがちだ。しかし、今回ハリヤナ州で聞いたように、単に学校に行ける環境があるかに問題があるわけではなく、学校を監視するシステムの構築などが重要であることがわかった。今回訪問したいくつかの学校は、公立や私立、小学校や高校など違いは様々であったが、すべての学校で共通して感じたことがある。それは、どの学校でもインドの子供たちが学問に対してとても意欲的なところだ。そんな勉強に対してやる気に満ちている子供たちが、より成長していけるような教育システムをつくることが途上国の教育問題の重要な課題であると思う。

(火口内 愛)

異文化交流ということで、日本文化を教えにインドの小中高の学校にお邪魔しました。どの学校においても子供たちは明るく友好的で、異文化の壁を感じることなく単しいひと時を過ごすことが出来たと思います。また、高校生との交流の際にインドの学生から日本の歴史に関する深い本質的な質問が出るなど、日本文化に非常に興味を持ってもらっていることが実感できる場面もありました。ただ、そう言った際にしっかりとした返答ができるように自国の文化についてより理解を深める必要があると感じました。

(前田 竜)

9/11 に訪れた高校での日本の質問会で、事前学習もあっただろうが日本の経済や資源のこと、またこちらも意識したことがないような日本特有の文化さえ知ってくれていて嬉しかった。学校の生徒のみなさんは、日本の子供と比べても非常にフレンドリーで、一人一人自分の (折り紙などの) 出来を何回も確認しに来たのが驚きだった。また、どの学校でも英語がある程度通じ、インド教育のレベルの高さを感じた。

(水野 加奈子)

インドの子どもたちに日本の文化を伝えられたのはとても良い経験でした。小学生は英語がわからないようで言葉の壁はあったけれど、そんなものは関係なくみんな折り紙に興味をもち取り組んでくれて嬉しかったです。初対面でかつ外国人であるわたしにも笑顔で近寄ってきてくれて、日本の子どもたちよりも活発でフレンドリーであるように感じました。

(本橋 加奈子)

2015 India Study Tour 旅程表

Date	Time	Schedule
9/5 (土)	13:50(JPN)	[出発/成田/MU524] グループ B
	16:15(CHN)	[到着/上海/MU524] グループ B
	18:40(JPN)	[出発/成田/NH827] グループ A
	21:05(CHN)	[出発/上海/MU563] グループ B
9/6 (日)	0:10(IND)	[到着/デリー/NH827] グループ A
	1:35(IND)	[到着/デリー/MU563] グループ B
	終日 (IND)	自由時間 デリー・メトロでオールド・デリーへ。レッド・フォート城内を散策。チャンドニー・チョーク散策。ジャーマ・マスジッドへ。カリームでの昼食–初めてのインド料理。コンノート・プレイスのスターバックスでコーヒ・ディスカッションへ参加。
	19:30(IND)	キックオフ・ディナー 於 Bharat Continental 内 Kadhai Tadka
	[宿泊]	デリー: Bharat Palace
9/7 (月)	10:00(IND)	ハリヤーナ州リワーリー県へミニバスで移動。 Khori - 123 101, District Rewari, Haryana. Sh. Sunder Lal, Chief Excutive, SCRIA(Social Centre for Rural Initiative & Advancement)
	13:00(IND)	昼食 於 Raj Palace
	14:00(IND)	コーリー (Khori) 村の SCRIA のコーリー・センターを訪問 最高責任者のラル氏から SCRIA の活動概要について 2 時間ほど説明を受ける。 コーリー・センターのほど近くにある SCRIA の活動拠点で、女性の地位向上と環境に関する活動のリーダーから活動内容を伺い、ディスカッション。女性の地位向上のための歌の披露もあった。
	17:00(IND)	ホテルへ出発
	[宿泊]	Hotel the Raj Palace. 夕食付き
9/8 (火)	09:00(IND)	出発
	10:00(IND)	チタプール (Titapur) 村を訪問 インドの地方自治制度の最下層に位置するグランサバーに参加する女性リーダーたちとのミーティング。
	13:00(IND)	昼食 於 コーリー・センター
	14:00(IND)	ムセプール (Musepur) 村を訪問 村落パンチャヤートの選挙で選ばれた代表者および村民とのミーティング。
	[宿泊]	Hotel the Raj Palace. 夕食付き
	17:00(IND)	ホテルへ出発
9/9 (水)	09:00(IND)	出発
	10:00(IND)	コーリー (Khori) 村を訪問

Date	Time	Schedule
		コーリー村の政府系初等学校を訪問。村の学校管理委員会のメンバーおよび学校の教員とミーティング。
	13:00(IND)	昼食 於 コーリー・センター
	14:00(IND)	デリーへミニバスで移動
	[宿泊]	デリー: Bharat Palace
9/10 (木)	10:00(IND)	出発
	10:45(IND)	デリー、ナライナ (Naraina) 村の自治体初等学校を訪問。 校長を表敬訪問。 第 3 学年 ~ 第 5 学年の女子生徒に、折り紙、箸の使い方などの日本文化を紹介。
	12:45(IND)	昼食 於 マクドナルド
	14:00(IND)	デリー西部のナンガルラーヤ地域にある DISHA の活動拠点を訪問。 オープン・スクールの子供たちとお絵かきや折り紙で交流。
	15:30(IND)	活動拠点近くのデリー・カント駅近くの線路沿いに広がるスラムを DISHA の人たちの案内で散策。
	16:15(IND)	DISHA のラヴィ・チョプラさん、ショブハナ・ラドハクリシュナさんと総括ミーティング。
	16:45(IND)	ホテルへ出発
	[宿泊]	デリー: Bharat Palace 夕食は自由
9/11 (金)	08:00(IND)	出発 デリー北西部の都市農村ジャウンティ (Jaunti) 村を訪問 ジャウンティ村は、モディ政権の SAGY と呼ばれる農村開発戦略に基いて国会議員によって選定されたモデル村である。
	10:10(IND)	サラヴォーダヤ (Saravodaya) 上級中等学校の第 10 学年 ~ 第 12 学年の男子生徒・女子生徒とミーティング
	11:10(IND)	ジャウンティ村の女性互助グループとのミーティング
	12:15(IND)	女性互助グループのメンバーの家庭訪問および村の散策
	14:00(IND)	ホテルへ出発
	[宿泊]	デリー: Bharat Palace 夕食は自由
9/12 (土)	08:00(IND)	アグラへ出発
	終日	タージマハル、アグラ城を観光
	[宿泊]	アグラ: Hotel Siris 18. 全員揃っての最後のディナー
9/13 (日)	08:00(IND)	グループ B と C はジャイプールへ出発
	10:00(IND)	グループ A はデリーへ出発
	21:30(IND)	[インディラ・ガンジー国際空港へ出発] グループ A
	[宿泊]	ジャイプール: The Wall Street Hotel. グループ B と C。夕食付き。
9/14 (月)	1:25(IND)	[出発/デリー/NH828] グループ A1
	2:55(IND)	[出発/デリー/MU564] グループ A2
	11:05(CHN)	[到着/上海/MU564] グループ A2
	13:20(JPN)	[到着/成田/NH828] グループ A1
	17:30(CHN)	[出発/上海/MU271] グループ A2-1
	22:55(JPN)	[到着/成田/MU271] グループ A2-1
		グループ B と C はジャイプールからデリーへ移動
	[宿泊]	デリー: Bharat Palace グループ B と C
9/15 (火)	21:30(IND)	[インディラ・ガンジー国際空港へ出発] グループ B と C
	9:40(CHN)	[出発/上海/MU537] グループ A2-1
	13:30(JPN)	[到着/成田/MU537] グループ A2-1

Date	Time	Schedule
9/16 (水)	1:25(IND)	[出発/デリー/NH828] グループ B
	2:55(IND)	[出発/デリー/MU564] グループ C
	11:05(CHN)	[到着/上海/MU564] グループ C
	13:20(JPN)	[到着/成田/NH828] グループ B
	17:30(CHN)	[出発/上海/MU271] グループ C1
	22:55(JPN)	[到着/成田/MU271] グループ C1
9/17 (木)	9:40(CHN)	[出発/上海/MU537] グループ C2
	13:30(JPN)	[到着/成田/MU537] グループ C2